
クローバー：コード

坂津狂鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバー：コード

【Nコード】

N2876Y

【作者名】

坂津狂鬼

【あらすじ】

——壊せ、命と同等の価値がある物を——。
それはメールから始まる壊し合いゲーム。

『ゲームの概要説明 参加者9名のうち一人の勝者を決めるゲームです。』

参加者全員、コード、と呼ばれる不思議な力を持っています。

参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合ってもらいます。

参加者が死亡した場合でも、物が破壊されなければ敗退にはなりません。

敗退条件は、ものの破壊です。

敗者は参加者の命、それと同等の物の破壊を禁じます。

勝者は失ってしまった大切なものを復元する事が出来ます。例えばそれが命であっても。

なお参加者それぞれのコードは《無影無綜》《非観理論》《否定定義》《完全干渉》《干渉不可》《禁思用語》《異見互換》《結論反転》《絶対規律》となっております。

ゲーム開始時刻は明日の0：00からでございます。

くれぐれも殺し合いと勘違いなさらないように。これはあくまで壊し合いです。

それではご検討を祈ります』

「月は何で明るいと思う？」

「そんなもん、太陽光を反射しているからに決まってんだろボケ」

二人は空に大きく輝く月を見上げながら話し合う。

「何それ。夢が無さすぎるでしょ」

「ロマンチストになれるような人生は送れなかったからな」

「どんな人生を送っても、人は夢を見たり奇跡を信じたりするものよ」

「夢を見たところでそれは夢でしかなくて、奇跡を信じたところで何かが変わる訳じゃない」

「……………それもそうね」

「随分と諦めが早いんだな」

「諦めるしかない人生しか送れなかったからね」

「……………そうか」

沈黙の間も二人はずっと月を眺め続ける。ただ何の目的も無く。

「俺は」

二人のうちの一人が、沈黙に耐え切れなくなつたためか独りでに呟く。

「俺はここから抜け出す」

「無理だよ。無謀だよ。無力な貴方には絶対に出来ない」

「……………そんなすぐに否定することも無いだろ」

「ここから抜け出すなんて無茶を言うからいけないんだよ」

「無茶じゃない」

「無茶だよ。絶対に無理。不可能。諦めるべきだよ」

「無茶じゃない。絶対に無理じゃない。不可能じゃない。諦めるべきじゃない」

「急にどうしたの？ ホームシック？」

「別に。家族なら昔、目の前で殺されたからホームシックではない

だろ」

「ならどうしてここを抜け出すなんて言うの？ 当てでもあるの？」

「当てもない。目的も無い。ただ、ここで終わるつもりも無い」

「バカなの？ バカでしょ？ バカなんでしょ？ ここから抜け出すなんて絶対に無理なのに何でやろうとの？」

「だから無理じゃない。お前が協力してくれば可能だ」

「誰が協力したところでここから抜け出すなんて——」

「絶対に出来る。俺は全てを欺いて見せる」

「なんだ、夢の一つ見れるじゃない。そんな哀れで儚い夢の一つ」

「夢じゃない。現実に変えてやるよ」

「……何を言ってるの？」

「簡単な事だ」

間を置き、答える。

「欺いてみせる、世界も神様も。だからお前は俺を信じて協力してくれればいい」

~~~~~

「……………」

朝日が眩しく、堪らず目を覚ます。

どうやら俺はいつの間にか寝ていたみたいだ。しかもソファで。

お蔭で体の節々が痛い。首を傾げただけで、関節がバキボキ鳴り響く。

寝惚けた頭で壁に掛けてある時計を見る。

時刻は4：44。捉え方によっては幸せと死遭わせに分かれてしまふような数字だ。

4という数字はややこしい。

死を意味したり、四つ葉のクローバーのように幸せの象徴だったり。幸運と不幸が織り交ざった数字である。

まあ俺は数字に不気味さを感じる事が少ないため、不幸の象徴やらと考えた事が無い。

だからといって幸運の象徴とも考えた事は無いが。にしても、体が痛い。二度とソファで寝るものか。

そんな事を心に決めながら、冷蔵庫へふらふらと向かう。

ちなみに俺の現在の住家はダイニングキッチンであるから、数秒で冷蔵庫に辿り着いた。

まあキッチンが別な場所にある家は相当な豪邸か、昔の建築物かのどちらかだろう。

ともかく俺は冷蔵庫の中身を探る。

……ス力である。空。新品同様の中身無し。

ふざけるなよ、あの野郎。

そう思いながらも朝っぱらから怒声を撒き散らしたら近所迷惑になる事だろう。

残念ながら俺は周りに気を遣える男であるため、静かに財布を持って家を出た。

理由は簡単。24時間365日営業の利便性社会の骨頂、コンビニに行って朝飯を確保するためである。

早朝の街は妙な静けさを帯びながらも、深夜よりかは人の気配を感じやすい。

日の光というものは人を引き付ける効果があるのかもしれない。

いや、生物皆、蛾のように光に惹き付けられる習性があるのかもしれない。

一体全体、光に何があるっていうんだ。

あんなもの、ただ眩しいだけじゃないか。

あんなもの、あんなものこそ一番、穢れている。

ポケットの中で何かが振動する。

家に置き忘れたと思っていた携帯がメールを着信したためだ。

にしても誰だ？ こんな朝っぱらにメールなんてしてくるドアホは？

『ちいはいシーチキンおにぎりが良い』

なんてメールを送ってくるドアホとドアホを足してドアホを掛けたようなドアホは？

いやまあ俺の記憶が欠落していない限り、こんな生意気なドアホは一人しか思い浮かばないんだが。

っていうかアイツだろ？ 冷蔵庫の中身を空にしやがった張本人は。

「ハア……………」

溜息を吐きながら携帯の待受け画面を見る。

画面の真ん中にデカデカと時刻が表示され、その右上に小さく何年何月何日何曜日かが表示されるシンプルな待受け画面。

今日は、11月8日月曜日。俺が転入生として高校に通う日だ。

「一輝、これシーチキンじゃないツナマヨ」

1時間近く朝の街を散歩し、コンビニで立ち読みをして、計二時間近く外に出てた俺が最初に言えに入ってから30秒後に言われた一言だ。

「別にツナマヨもシーチキンも変わらないだろ」

「変わるよ。大きく変わる。産業革命レベルで変わる」

絶対に大袈裟に言ってるやがる。

「つーか、そんなに文句言うなら食うな。代わりに俺が食うから」

「一輝に食われるくらいならゴミとして捨てられた方がマシってツナマヨが言ってる」

ツナマヨは喋りません。

俺は溜息を吐きながら先程から文句を言ってくる主の方を見る。

腰まで伸びきった銀色の髪、左右で瞳の色が違ういわゆるオッドアイ。右が青で、左が黄色……じゃなくて琥珀色だっけか。

ともかくそんな日本人と言う枠組みを超えている容姿をしている少女。

名前は濁川千秋。にじかわちあき戸籍上は俺の義理の妹ということになっている。

まあ、なんやかんやコイツとは付き合いが長いから義妹と言うよりは幼馴染や親友とかの部類に入る気がする。

仕方が無く、俺の義妹である感じだ。仕方が無く。

そんな銀髪少女は散々文句を言っていたツナマヨおにぎりを一口で頬張り、口元にご飯粒を付けるという定番の絵面になっていた。

………これを教えずに学校で恥をかく義妹の姿を見たいという悪意を持って何が悪い、いや悪くない。

「ん？ 私の顔に何か付いてるの？」

あまりに俺が長い間千秋の顔を見ていた為、反射的にそんな事を訊いて来た。

「お前のその色違いの目はいつ見ても不思議さを感じるな、て思ってたんだ」

「他人が気にしている事をさらりと言う。一輝って本当にデリカシィが無いよね」

「生活力が無いよりかはマシだ」

大体、二日前までゴミ屋敷だったこの家を一般生活が出来るレベルまで掃除してやったのは誰だと思っていやがる？

俺だぞ、俺。

到着早々この家の惨状を目の当たりにした俺が、寝る間も惜しんで二日間！

カビやらゴキブリやら異臭やら何かよく分からないキノコやらを撃退して、やっと終わったと思ってソファに横になっいたらいつの間にか寝ていて、体の節々が痛く、それでも朝食をと思って冷蔵庫を開ければ中身が無く、仕方が無くコンビニへ行ってる途中にシーチキンおにぎり買って来いと言われた上に、買って来たらツナマヨだと文句を言われたこの俺の感情が分かるか！？

銀髪でオツドアイだからってお嬢様でも無いお前が料理、掃除、洗濯やらの家事全般が出来なくて良いわけにはならないだろうが！  
そもそも何なんだよ！ 掃除をしている時だって！

近所の方々は『あらカメラは何処なの？』って完全にテレビの特番とかで掃除していると勘違いしているし！

そのまま立ち話を続けてこっちの作業を遅らせるし！ こっちの人員は独りなんだからわざわざ掃除してるときに邪魔すんなよ！

っていうか有名なゴミ屋敷にすんなアア！！

「……一輝、全部口から出てるよ」

「お前に聞こえるように言ってたんだよ！」

このダメ人間精神満点の銀髪女がっ。

俺の自分用を買ってきた鮭とシーチキンと昆布のおにぎりを数十秒で食い終わり――、

「ちよっと待って！ 今シーチキン有ったよね！？」

「黙れよ銀髪。一々細かい事にうるさいんだよ」

「細かいって言うか、わざわざシーチキンがあるのにちにツナマヨ与えたの!？」

「その自分のことをちいって呼ぶ癖をいい加減直せって言うてんだろ。ガキじゃないんだから」

「ガキとかガキじゃないとかそういうの関係無いよ!　ちいのシーチキンを取りやがって、吐け!」

殴りかかろうとする千秋を片足で押さえつけながら優雅にお茶を飲む。

よし、朝食も取ったし、真面目な話でもするか。

「おい千秋。本当に居るんだよね？」

「……居るよ。間違いない。確認した」

両手をブンブンとアホのように振り回すのを止め、千秋が答える。

「三人だっけか？」

「二人に減ったよ。《否定定義》と《非観理論》が協力して《完全干涉》を倒したからね」

「それぞれの名前は？」

こうなまきあずみ

「《否定定義》は鋼風梓美。《非観理論》は虎杖紀亜。いたどりきあ その両名とも、今日から一輝が通う高校に居るよ」

「知ってるさ。だからわざわざ俺はそこ高校に転入するわけだしな」  
もう一口お茶を含ませた後、俺は面倒臭そうに言う。

「……《完全干涉》はもう反応無しなのか？」

「案外そうじゃないんだよね。面白い事に」

「何が面白いんだよ」

ニヤニヤと不快な笑いを浮かべる千秋に俺は問いかける。

「まずは《非観理論》だけだね、使用者ユザーが途中で変わってるんだよ」  
「どうやって？」

「前使用者の日記帳……正確には記録帳を見たら、簡単に次の使用者になっちゃったの」

「それが《完全干涉》にも起こってると？」

「そんな感じかな？　ちいにも詳細はよく分かんないから」

「使えない女」

「酷ッ！」

「そんな事より、もうそろそろ準備しないと学校に遅れるぞ」

「ああ、本当だ」

慌ててどこかに行つた千秋。

俺はと言えば、そんな千秋の無鉄砲な行動を「バカだなあ」なんて思いながらゆっくりとお茶を飲んでいた。

………　つて、何で俺はそんなに優雅に過ごしているんだよ！？  
俺、今日が初日だからいつもより早く出なきゃいけないんじゃないのかよ！！

残っていたお茶を流し込み、バカにしていた千秋と同じ行動を取っていた俺がいた。

## s 2 (後書き)

あらずじ書かなきゃいけないよなあ  
.....

コード。

俺や千秋はそう言っている。

所謂、超能力や異能のようなものだ。

他には、仮想空間具現化現象などと言った堅苦しく長かったらしい名称もあるそうだが、俺達はコードと言っているから、コードで統一する。

コードの概要は、自分のルールだ。言い換えれば、自分だけの極論や暴論。

それを能力のように使うことが出来る。

いくつかコードにも共通したルールがある。

一つ目。能力として使用できるルールは一人一つまで。変更はできない。

二つ目。コードは何かを指定しなければ発動できない。

三つ目。コードは現実世界では使えない、という風に誤認してしまう。

俺が知りうる限りではこの三つがどのコードにも共通した事項である。

一つ目、二つ目までは異能系の漫画などでよくある設定だと思うから詳細は言わない。というか書いて字の如くだ。

三つ目に関しては、少しややこしい事になるため説明しにくいのだが。

簡単に言えば、思い込みや先入観が先導して、結果、三つ目の共通事項が生まれたということになる。

まあそもそもこれら全て、俺が考察したのではなく受け売りなのだが。

ともかくそんな不思議な能力(?)であるコードは、実は俺と千秋も使える。

使えるからといって、だからどうした、という話なのだが。

「濁川一輝<sup>にしかわ かずき</sup>です。父の仕事の事情でこちらに転入してきました。これから宜しくお願いします」

自己紹介のときに黒板に氏名を書くなんてのは、アニメや漫画とかのみの設定なのだろうか？

そう俺が思った原因は、単に自分が担任教師に黒板に名前を書いてくれと言われなかったからである。

わざわざ自分から名前を書いたとしても、図々しい奴だと思われるだろうからそのまま言葉のみの自己紹介をした。

しかし驚いた。

自分の席は一番端の廊下側の一番後ろの席だと思っていたのだが、ちょうど俺の転入に合わせて席替えなんてものをしたので、結局、俺は中央の一番後ろから二番目というなんとも微妙な席に座らされたのだった。

自分のくじ運の無さとその微妙な位置に俺は驚いた。

まあそんな事はともかく。

午前の授業を平然と乗り切り、昼休み。

当然、弁当など持参しているわけもなく、行きの途中でコンビニに立ち寄る時間もなく、虚しい昼を送っている最中、千秋からメールがあった。

『ちいのお昼ご飯がない。ください』

間髪入れずに返信には『だが断る』と打ち、俺は自分の教室を出て校内の散策を始めた。

出た理由は簡単。

なんとなく、そろそろクラスの奴らの一人か二人が話しかけてくる様子を取っていたからだ。

人と接するのが苦手、というわけではないが、あまり交友関係が無駄に広めても行動しにくくなるだけである。

だから余り人と喋らない根暗な性格を貫き通そうと意識した結果、こんな行動を取ったわけだが。

「一輝、弁当」

廊下を適当にぶらついていたら千秋と会った。まあなんたる偶然。俺に差し出してくる千秋の手にぶつ刺すシャーペンが無くてガツカリだ。

「千秋、情報」

もう千秋とは学校で会っても二度と口を利かないことを心の中で誓いながら、俺は千秋に聞く。

「それより弁当」

そう返してきた千秋の頭を鷲掴みし、無理やり場所を移動する。つていうかコイツは何だ？ 何なんだ？ 朝から俺をまるで自分の執事か何かと勘違いしてるんですか？

「痛い痛い痛い痛い痛い、ごめんなさい放して」

謝辞を入れてきたので俺は仕方が無く、千秋の頭を放す。

「《否定定義》と《非観理論》についての情報。今すぐに言う」

「今、鋼尻梓美も虎杖紀亜もそれぞれの教室で昼食を取っています。ちいもお弁当食べたいな」

「お前、自分の事をちいとか言つて恥ずかしくないの？ それともわざとキャラ狙つてやってるの？」

いい加減、昔からの癖を直せよ千秋。溜息を吐きながら俺はそう思う。

しかし、《否定定義》《非観理論》の両者とも接触をわざと避けているのか。

それとも、定期的に……例えば校外やメールのやり取りなどで接触しているのか。

こちらら早く、この二人と接触したいんだが。まあ焦っても仕方がないか。

ともかく千秋に二人を見張らせておくのが一番無難だろう。

「おい、千秋」

「ちょっと待つて。二人とも動いた」

千秋が何か携帯とかを見るわけでもなく、焦点が合っていない視界のまま俺に言う。

「二人はどこに？」

「……特別教室棟の階段、多分そこに向かつてる」

「わかった。行ってくる」

「え、もう仕掛けるの！？ 早過ぎない！？」

今度はしっかりと俺に焦点を合わせて、千秋が反対してくる。

「殺し合いをするわけじゃない、話し合うだけ。それと少し教えてやるだけだ」

「絶対に争いごとになると思う。ならなかったら奇跡」

ジト目で俺の評価を表してくれるなんて、なんて妹だ。あとでお仕置きが必要かもしれない。

「あつちが一方的に警戒して攻撃をしかけてすべて失敗するだけだ。何の問題もない」

コードは火を出したり、水を操ったりする魔法的なものじゃない。

まあ使い方によっては出来るだろうけど、そんな最初から物理的破壊をもたらすような危険な代物じゃない。

限りなく、周りに被害は出ないだろう。

「……………特別教室棟、2階と3階の間の踊り場に二人とも集まったみたいだよ」

千秋が正確な位置を教えてくれたため、俺はいそいでそこに行く。まあでも、見送りまでジト目じゃなくても良いじゃないか千秋さんよ。

### s3 (後書き)

展開早いよね。そうだよね。  
まあggaggよりもマシか。マシかな？

「本当にありがとう虎杖君。貴方のお蔭でテストはバッチシ」

「いやー、もう僕は何も言えないよ。《非観理論》をカンニングの為に使う破目になるなんて」

男子高校生と女子高校生の話し声が聞こえる。

……… って当たり前か。ここは高校なわけだし。

しかしこの特別教室棟つてのは白昼なのに人が無い。放課後になれば部活などで賑やかになったりするんだろうけど。

まあそんな事はどうでもいい。

さっさと俺も《否定定義》と《非観理論》のお喋りに参加しなきゃな。

「いやー、それは確かに驚くな。コードをそういう風に使うとは」

「……… ツ!？」

三階の踊り場に登場した謎の学生を最初に見たのは《否定定義》使用者である鋼風梓美。

後に続いて《非観理論》使用者である虎杖紀亜も謎の学生を見上げてくる。

謎の学生たる俺は平然とした顔で「あ、ドヤ顔決めといった方が良かった」なんて事を思っていた。

「誰？ 虎杖君の知り合い？」

「……… いいや違う。今日ウチの学校に来た2年の転入生だ」

「別に《非観理論》を使って調べなくたって名乗ったのに」

俺の口から《非観理論》という言葉が出た事によって、さらに二人が警戒を強める。

んー、なんかマズい。この二人に漂う緊張感は完全に臨戦態勢を整えてるって感じた。

別に暴力やコードを振りかざして二人を屈服させようとなんて微塵たりとも考えていないのに。

「どうせそつちには《非観理論》があるから自己紹介する必要も無いんだけど……まあ、小さい時に散々仕込まれた事だからな。礼儀は通さなきゃ」

戦闘前の敵キャラとかが言いそうな台詞だなあ、なんて若干傍観者を気取りだした内心を無理矢理引き戻し、俺は二人に自己紹介をする。

「俺の名前は濁川一輝。使うコードは《無影無綜》。自らと自らが触れた物質を消し隠す事が出来るんだ」

「コード……？」

鋼風梓美の方が俺の言葉に少しばかり首を傾げる。

「仮想空間具現化現象とも言う。けどそれだと長いし、コードって言った方が短くてカッコいいだろ？」

まあ正直なことを言えば、俺はカッコいいからコードと言っている。

「俺がこの学校に転入してきた理由は二つ。一つはぐうたら妹の生活改善のため。一つは、お前達二人だ」

「……わたし達を殺しに来たっていうわけ？」

「《完全干渉》やお前と一緒にするなよ殺人鬼。俺はもっと穏やかな人間だ」

鋼風梓美は少し眉を動かし、虎杖紀亜は苦笑いを浮かべる。

「俺はまあ、簡単に言えば、お前達を独断で審査しにきた」

「審査？」

鋼風梓美がまた首を傾げてくる。虎杖紀亜の方は完璧に口を挟まない気である。

まあ話す相手は一人の方が楽か。

「お前たちは分かっているだろうが、《否定定義》と《非観理論》の組み合わせは非常に危険だ。過去、未来、現在の情報の全てを掴みきったと言っても過言じゃない」

「それで危険因子であるわたし達を独断と偏見で審査して、結果、本当に危険だと貴方が判断したら？」

「当然、殺す」

俺がそう言った途端、鋼風梓美が何かを投げてきやがった。

俺はその場から一旦姿を消し、何かが通り過ぎた後、また姿を現す。

「それが《無影無綜》？ 逃げが中心のルールみたいね」

「ドアホ。人の話を最後まで聞くように、両親に教わらなかったか？」

「生憎、その両親は小さい頃に目の前で殺されちゃってね。わたしはあんまり両親に教わったことを信じてないの」

「そりゃ、ご両親が恵まれない」

「別にそんなわたしには関係無いっ！」

鋼風梓美は勢いよく階段を上って、俺との距離を一気に詰めようとする。

このお転婆娘が。別に俺はあんた方と戦う気は無いのによ。

俺は後ろへ下がり、どうにか廊下まで退く。

「随分と逃げ腰じゃない。殺すんじゃないの？」

「殺すのは判断後だ。まだ判断すらしない」

「なら良かったじゃない。良い判断材料ができて」

ああそうかい。このお嬢さんは俺の答えなど聞いていないというわけかい。

上等だ。お兄さんに喧嘩を売ったらどうなるかを身を持って知るが  
良い。

「そこまで死にたきゃ、さっさと死ねよ」

直後、三階の踊り場が丸ごと消える。

《無影無綜》。自らと自らが触れた物質を消し隠すコード。

そしてその使用者は俺である。俺が居た……足で触れた場所は隠す事が可能だ。

「さて、問題です。俺は先程までどこに居たでしょうか？」

「……………ッ否定！！」

自由落下しかけていた鋼風梓美の体は尻餅をつくように踊り場に落ちる。

《否定定義》。ルールを無効化するコード。

つまりそれは、相手の理論であるコードをも無効化できるという事。  
一筋縄ではいかない相手だ。

……… って違う！ 相手じゃない！ 俺は平和的にことを進めようと思ったのに！

いつから少しバトルっぽくなってんだよ、バカか俺は！

ああー、これは千秋に怒られる。絶対に怒られる。そして弁当と言われ続ける。

っていうか。

「おい、お前スカートの隙間からパンツ見えてるぞ」

ホント、最近のスカートって短いよな。冬場とか絶対に寒いだろうに。どうするだよ。

まあミニスカよりかは長いけども。本当に冬場どうするんだよ。っていうか今冬場だろどうするんだよ。

「~~~~~ッ！！ …… 殺す」

物凄く冷淡でまるで機械のような冷たさを感じる声が鋼凧梓美から発せられる。

ああー、俺の発言一つ一つが平和という文字をぶち壊していくなんて。

もういつその事、俺のコードは《平穩崩壊》に改名したほうが良いんじゃないか？

鋼凧の右手にはシャーペンが握られている。

ただの文房具だとは思うが、人によつては目に突き刺して凶器へと変貌させる天才がいるんだ。極稀に。

そしてそういう天才の雰囲気は今、鋼凧は纏っている。

まあ平和とは少しかけ離れたが、ここは一つ遊びを、  
「かくれんぼでも、始めようじゃないか」

#### S 4 (後書き)

やっぱりバトルっぽくなると俺ってグダるなあ  
.....

先程から何度か、鋼凧に姿が見つかってしまっている。

というよりは《無影無綜》を無理矢理《否定定義》で無効化させられて見つかったているのだが。

《否定定義》

あらゆるルール……物理法則や常識、さらにはコードなどを無効化できる中々強く厄介なコードだ。

対するこっちは《無影無綜》。

自らと自らが触れた物質を消し隠すことができるコード。

しかし消した物質は《否定定義》によってすぐに元に戻っされてしまふ。

だからまあ普通に考えたら、《無影無綜》が《否定定義》に勝てるわけがないのだ。

真正面から渡り合えば、の話だが。

さて、そろそろ《無影無綜》の本来の使い方をお嬢さんに教えてあげようか。

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「……チツ、どこに行ったあの変態」

鋼凧は特別教室棟の廊下にてボヤク。

謎の転入生の姿は何度か《否定定義》を使って、捉えてはいるものの、すぐにまた《無影無綜》によって姿を消されてしまう。

しかしそれでも転入生が特別教室棟にいることは分かっている。

(……しかし、本当に何なの？ あの転入生は？)

虎杖に《非観理論》を使わせてもう少し調べ上げていればよかったと、鋼凧は少し後悔する。

《否定定義》はコードによる相手の小細工、策略に対して強い。

しかし無効化するだけであるため、自らが小細工や策略に気付かなければ意味が無い。

鋼凧自体が相手の行動を先読みするようなことを苦手としているため、情報戦そのものが弱点となっている。

鋼凧の予測では、あの転入生はそういう小細工や策略などが得意なタイプだ。

決して真正面から対決せずに相手の背後を刺すような、そんなタイプの人間だ。

（……虎杖君のところに一旦戻ったほうが良さそうね）

### 《非観理論》

過去未来現在のあらゆる事象が観測できるコード。そしてあらゆる者から観測されないコードでもある。

しかし《非観理論》を使って観測した事象には言動、行動などの手段を持つてして干渉することが出来ない。

だが、《否定定義》を使えば、その制限を無効化することができる。つまりは、あらゆる事象の結末を観測することが可能なのだ。そしてその結末を変えようと足掻くことも可能となる。

簡単に言えば、相手がどういう小細工や策略を仕掛けてきてどういう結果になるのかを予知することが可能となるということだ。

目的変更し、階段へ向かおうとする鋼凧。

しかし、進行方向の廊下の床が姿を消した。

直後、鋼凧が今まで歩いてきた廊下の床が姿を消した。

「……………否定」

近くに居る、と直感的に感じ取った鋼凧は迷う事無く《否定定義》によってコードを無効化する。

《無影無綜》の厄介なところは見えないということだ。姿を捉える事が出来なければ、攻撃が当たらない。

だから迷う必要無く《否定定義》によって無理矢理、姿を現させて攻撃を加えればいい。

その考えが間違えだった。

「動くなよ」

鋼皿が間違いに気付くのはすぐだった。

転入生は鋼皿の目の前に現れ、包丁を首筋に当ててきたからだ。

「そんなの、持ってましたっけ？」

「いいや、これは学校のだよ。借りてきたんだ」

借りてきた？

鋼皿は転入生の言葉に疑問を抱くも、それを口に出す事はできない。不用意に喋ろうとすれば、包丁で斬りつけられてしまう可能性があるからだ。

「まあこれでやっと、落ち着いて話し合えるな」

■□■□■□■□■□■□■□■□■

《無影無綜》の正しい使い方。

それは言うまでも無く物を消すことだ。というかそれ以外何も出来ないのが《無影無綜》。

だからそれを最大限に活用する。

例えば鍵が掛かって開かない調理室に入りたい時。ドアを丸ごと消し、無理矢理、侵入する。

例えば机や棚などで何処に仕舞ってあるか分からない包丁を探す時。棚や机を消し、入っている物を全てを無理矢理、外に出す。

この二つだけでもう窃盗し放題ではあるのだが、残念ながら俺は泥棒じゃない。

散らかした物はしっかり仕舞って来た。証拠隠滅のためであるが。得物の調達が終われば、あとは気になるあの子を振り向かせるだけである。

……いや正確には抑止させて、話し合いに持ち込むだけなのだが。パターンとしては色々あるが、一番楽で二人つきりで話せるものを選択した。

ようは退路と進路を消し、首に得物を突きつけて相手の動きを抑制

するものだ。

そして今、それは見事に成功し無事に話し合いに持ち込むことが出来た。

めでたし、めでたしという事だ。

「ええーと、《否定定義》。言っておくが審査と言っても見る要点は二つだけなんだ。ほぼ確実にお前達を殺すことは無いと言ってもいい」

「首に刃物突き付けておいて、そんな言葉が信用されると思ってるの？」

「お前が思う思わないじゃない。俺は真実を話しているだけだ」

おおよそだが鋼風よりも、虎杖紀亜の方が絶対に話を通じる。

こいつは人の話を聞く訓練から小学校でし直してこい。

「見る要点の一つはお前達の情報網。簡単に言えば、他にも通じてるコード使用者がいるのかって話だ」

「殺した奴は一人いるけど、今のところはわたしは虎杖君と貴方だけよ」

「……………つーことはこっちが先だったわけか」

「……………何を言ってるの？」

「別に。こつちの話だ。それよりも——」

「そこまです」

背後から聞こえた声に、俺は目だけを向ける。

そこに居たのは千秋と虎杖紀亜だった。そして千秋は相変わらずジト目で俺を見ていた。

まあ確かに、殺し合わない言っておいて女子生徒の首筋に刃物当ててますもんね。

完全にこれは千秋に怒られる。

## S5（後書き）

ほらやっぱりグダった。  
戦闘グダった。もうダメだ俺。戦闘無理だ。

「一輝言ったよね？ 問題無いって」

「……はい」

「で、一輝はさっきまで何をやっていましたか？ ちいに分かり易く説明してみてください」

「……なあ、お前いい加減ちいって呼ぶの——」

「つべこべ言わずに早く。ナウ」

「……《否定定義》のコード使用者である鋼風梓美が好戦的な態度をとった上に殺意をむき出しにされて自分の命の危機を感じましたから、自己防衛のため、鋼風梓美の首筋に刃物を突き立てて抑止していました」

叩かれた。千秋にジト目で思いつき俺を叩いて来た。

「一輝が交渉とかには向いていない事がよく分かった」

「俺は交渉とかに向いてないわけじゃない。お前よりは向いてる自信がある」

「分かった言い直す。一輝は平和的交渉には絶望的に向いていない事が詳しく理解できました」

「……返す言葉もございません」

いや別に俺が、俺のみが完全に悪いわけじゃないと思うんだよ。

鋼風にも非はあるし、そもそも鋼風が仕掛けて来なければこっちは争う気なんて微塵も無かったんだから。

俺のみが怒られるのは不公平って言うか……まあ公平なんてものがあるなんて信じては無いけど……絶対に千秋の言い方だと俺が10割方悪いように感じるじゃんなんか。

気に食わないな……気に食わない……。

「ウチの一輝が、本当に失礼しました」

まるで犬が誰かを噛んだりした時のように千秋が謝る。

いや、俺は犬ですか？ 躰けが成ってない犬とでも言いたいんです

か？

「いえ、ロクに話を聞かないで喧嘩を吹っつけた僕達も悪いわけですし」

虎杖も、まるで犬同士が吠えあつた時のように苦笑いをしながら謝る。

ちよつと待て。鋼皿が犬だろうがネコだろうがダニだろうが構わないが、俺をそれと同種のように扱うな。

俺はあんなにバカじゃない。アイツと同種にされるのだけはご免だ。

「ちい……私たちがそちらに接触した理由は、偵察の一環なんです」「審査つて、さっきは言つてたんですけど？」

「まあ審査もあながち間違つてはないですけど。私たちはあるコード使用者を探してるんですよ」

千秋の言う通り。俺たち……正直言えば、俺があるコード使用者を探している。

「そいつを見つけたらどうするんですか？」

「半殺しだ」

虎杖の問いに、千秋の代わりに俺が答える。

「あいつのコードを奪つて、精神を壊して、牢獄へブチ込む」

「なんだ。わたしとなんら変わらないじゃない、貴方も」

「変わるさ。殺すなんて生温い方法を取ってるお前とは」

口を挟んできた鋼皿をすぐに否定し、また睨み合いになる。

つていうか鋼皿を睨んでたら、千秋に蹴られた。痛い。

「ともかく私たちが捜しているコード使用者は危険なんです。世界レベルで」

「……それで僕の《非観理論》を使ってそのコード使用者を探そうと？」

「ちよつと違います。《非観理論》でも見つかるかどうか怪しいので、そんな曖昧なものには頼りません」

虎杖は少し驚いた顔をする。

まあ本来、《非観理論》は全ての事象を観測できる。

でもコードを使えば、その監視の目を掻い潜る事だつて可能だ。

虎杖が驚いたのは、こいつがまだそれ程多くの……《否定定義》と《完全干渉》の二つのコードしか近くに無かったからだろう。

「私たちが接触した理由は、私たちが追っているコード使用者がそちらに接触してないかを確かめるためです」

《否定定義》と《非観理論》。

この二つが揃えば、無限に未来を予知できる。

出来れば、味方につけたいコンビである。まあ俺は鋼凧とは気が合わないと思うから味方に付けたくないんだけども。

ともかく俺が追ってるコード使用者は今何処で何を考え何をしてるかが分からない。

だからまずは悩みの種を摘み取っていく。

取り敢えず、こいつらはまだコード使用者に会っていない。

だが、後々接触される可能性がある。だから俺はわざわざこの高校に監視目的で転校してきたわけだ。

「一輝は少しはしゃぎ過ぎましたけど、私たちに敵意はありません。できればそちらと協力したいとも思っています」

「絶対に嫌だ」

嫌な気が合う俺と鋼凧は同時に言い、その直後、俺は千秋に踏みつけられた。

このヤロウ、絶対に後で覚えておけよ。夕飯はお前の嫌いなピーマンとナス炒めにしてやる。

「ま、まあこつちも多分……最低限、僕は敵意がありませんのでそちらに協力したいと思います」

踏みつけられている俺の姿を見て、口を押えてバカにするように鋼凧が笑っていたので俺は唸り牙を剥きながら威嚇していた。

……じゃなくて、苦笑いをしながら虎杖が返事をする。

取り敢えずこれで、千秋と虎杖の協力関係は結ばれたわけだ。

ただ一つ言える事があるとするならば。

その後、放課後の体育館裏で俺と鋼凧が喧嘩をしたことを知ったら、

もう次は千秋が激ギレして折檻してくるかもしれないという事だ。

「……………チッ」

転入初日の騒動から数日後。

俺が起きた時刻は4：27。

いつも学校に行ってる時間は7：00。

遥かに無駄に早起きしてしまった模様だったため、朝食と弁当を作ったりしていたわけなんだが……。

現在時刻は6：30。

そろそろ眠り姫、千秋を起こしに行くべき時間か。

っていうかアイツ。そんなに夜更ししてるわけじゃないのに、むしろ夜の8時には寝てるような子供のような生活を送っているのに、何でこの時間までブツ通しで寝れるんだ？

……まあ一番打倒な理由は精神的な疲労だろう。

容姿のこととでやかく言われないわけが無い。俺は知らないがイジメなどもあるかもしれない。

まあイジメなんて物をされれば、千秋はその倍返して相手の精神をスタボロにぶち壊すこと間違いないが。

「入るぞー……………」

元ゴミ屋敷、現俺の住処であるこの家。

2階まである一戸建てで、まあ物凄く広いわけでは無いが、家族単位で暮らすには問題無い広さがある。

その2階の部屋の一つのドアを開け、俺はノックもせずに入。千秋の部屋。ベットとクローゼット、それに縦長のデカくて全身が見れる鏡……姿見が一つ置いてあるだけだ。

まあ本来なら無駄なプリントやらペットボトルやら缶やらが散乱していたのだが、つい最近、俺の手によって全て片付けられた為、現在はいこうしてシンプルかつ綺麗な部屋となっている。

……………んな苦勞話はどうでもいい。

ベットに薄いタオルケットを一枚掛けて寝ている千秋。

秋も暮れ始め、もう一ヶ月しないうちに12月になるのにタオルケット一枚は寒かるうに。

「おい、起きろよ眠り姫」

そう言つてタオルケットを引き剥がす俺。

そして、その直後、静かにまたタオルケットを丁寧に掛けて上げたのは、決して千秋を可哀想だと思つてやったわけじゃない。

まさか義妹であり幼馴染のようなものであり親友でもある千秋が裸ワイシャツで寝てるとは思わなかったからです。

裸ワイシャツでタオルケット一枚……………こいつは風邪を引きたいのか？

「おい、千秋。さつさと起きろ。学校遅刻するぞー」

無理矢理起こす方法から、体を揺さぶつて起こす方法にチェンジ。

数秒後、のそりと千秋が起き上つてきた。機嫌が悪そうな顔をして。

「…………ちい、吐くかと思つた」

「吐く物も食つちやいないだろ。さつさと朝飯食え」

そう言つて俺は千秋の部屋から出て行き、1階に下りダイニングに一人分の食事を用意する。

俺はもう千秋を起こしに行く前に食い終わつてるから、千秋の分だけを用意する。

十数秒後、千秋が騒がしく階段を下り制服姿で俺に向かって喚き散らす。

「一輝！ 見てないよね！？ ちいのその…………見てないよね！？」

「ああ、見てない。それにしても人間の体つて凄いやな。昔は貧相だったものも今では大きく豊かになつてるんだものな。俺さっき驚いちゃったよ」

「それつて何の話！？」

「にしても裸ワイシャツにタオルケット一枚は止めておけ。もうそろそろ寒くなつてくるんだから風邪引いちまうぞ」

「見たなあ！！」

千秋が朝から柄にもなく無駄に大はしゃぎしている。何故だろう？  
あ、バカで寝起きだからか。

「おいおい千秋、胸倉を掴むな。行儀が悪いだろ」

「行儀も礼儀も仁義も知ったものかあ！　ちいの恥ずかしい姿を見た限り、一輝の死は確定しているう！」

「恥ずかしいと思うなら、ちゃんと服着ればいいじゃないか。それに俺はお前の裸を見たわけじゃないし、ワイシャツ越したし。それと後、下着越してもあったな」

「だからその下着姿が恥ずかしいってちいは言ってるの！」

「ワイシャツが有った。問題無い」

「うるさい黙れ一発殴って記憶を抹消してやる一輝のバーカ！」

「ハア……………6：42。賢いお前なら意味分かるよな？」

俺が現在時刻を言った途端に急いで朝食を摂り始める千秋。

本当、バカって扱い易くて楽だね。

そう思いながらテレビを……………付けたくても我が家にはそんな物はないので、新聞を……………読みたくても我が家はそんな物を取っていない。仕方が無いので、携帯でニュースを見る。

政治、経済、その他諸々。スポーツと芸能は除いてる。興味が無いからだ。

暇ならニュースを見る。義父……………まあ俺と千秋を引き取ったクソ野郎に昔教え込まれたことの一つで、俺にとってはちよっとした一環になってきているものだ。

ニュースは出来事の断片的な部分しか伝えられないが、多くの情報を得られる。

その多くの情報の中には、時々コード使用者が起こした事件も含まれている可能性すらある。

それに、コードなんて異能を持っていて悪用をしないのは平和ボケで頭がマンネリ化したような奴かよっぽど正義に憧れたバカ野郎しか居ない。

だから月一のペースでコード使用者が起こした事件が入ってるはず

だ。

そんな風に、義父は言っただけのような気がする。

まあその後、その事件を見つけれられるかどうかはお前の洞察力や直観次第だけだな、と付け加えていたが。

直観なんて哲学的な言い回しでムカついたことを今でも覚えている。しかしまあ……………。

「送検中の強盗致死罪の男が逃走。今朝方、この市内で目撃された情報あり……………か」

「普通の人からしたら怖いね、それ」

朝食を呑み込みながら、千秋がそんな感想を呟く。

まあそうだろう。普通の人も、普通じゃない人も警戒すべき事件だ。この市内は思ったよりも物騒かもしれない。

s 7 (後書き)

グダる。いっそ、もう本番へ入ってしまおうか？

「……え、今なんて言った？」

放課後、千秋に呼び出された俺は、誰も居ない、なんとも不気味な教室にて話を聞いていたのだが。

あまりにも唐突で、というか予想の斜め上なことを言ってきたので、もう一度と聞き返してしまった。

「だから、今日ウチに梓美ちゃんと虎杖君を招いて親睦会をやるうと思っ……」

分かった。千秋はきつとアホなんだ。

「……ねえ一輝。ちいの話聞してる？」

「聞いてない。聞かない。聞きたくない」

「何？ 梓美ちゃんが来るのが恥ずかしいのお？」

よく分からないが、多分アホの千秋なりに俺をからかおうとしているんだろう。

しかし残念。俺は少しでもム力つく台詞を言われると徹底的にそいつを虐めなくなっちゃう性格なのだ。

……嘘である。しかし千秋の場合は、それは真実になる。

「まあ恥ずかしいな。わざわざ家に来てもらってお前の裸ワイシャツ姿を見て帰ってもらうのは。いくら義兄でも恥ずかしい」

「いや、あれはそのええと……っていうか見たんでしょ！ ちいのその……朝の姿！」

「見た見ないはこのさい関係無い」

「関係ある！」

「重要なのは、お前がはしたない姿で寝ていた事だ」

「うう……」

「お兄ちゃんは驚きだ……まさか妹が……血が繋がってはいないとはいえ、俺の妹がそんな変態趣味に目覚めたなんて……」

「変態趣味って何！？ 一体、ちいが何に目覚めたっていうの！？」

「露出だろ？」

「目覚めてない！」

「いいよ、もう。自分に嘘を吐かなくなつて。お兄ちゃんは驚かないよ、妹が露出狂でも」

「そこはむしろ驚くべきでしょ！？　つていうかちいには自分に嘘なんて吐いてない！」

「もういい……お兄ちゃんは妹が露出狂でも見捨てたりしないから。むしろ喜ぶから」

「喜ぶって何！？　一輝の方が変態じゃない！」

「バカ野郎！　男は皆、変態なんだよ！　おっぱいに至福を感じるんだよ！」

「~~~~ツ！！　変態！　最低！　一輝なんか死んでしまええ！」

「さて、千秋を一通り弄り終わつたところで」

「今までの全部冗談だったの！？」

「ああ冗談だ。男は皆、変態なんかじゃない。男は皆、狼なんだぞ。覚えとけ」

「まあ確かに一輝は狼っぽいけど……」

俺が狼？　つまりそれって……。

カッコいいって事か！　いやあー、千秋も嬉しい事を言ってくれる。本来なら狼つてのは嘔吐きや独りぼっちとかを意味するのに、カッコいいという風に使うとは。

中々良いセンスしてるじゃないか千秋。

まあそんな事はどうでもいい。

「鋼皿と虎杖を誘って、ウチで親睦会をしてもいいぞ」

「えっ！？　ホントに！？」

「ああ。一応あの二人には色々言わなきゃいけない事があるし……追加で忠告もしときたいしな」

「……忠告？」

「まあともかくウチで色々話をしよう。千秋は二人を誘ってくれ。」

「分かつた」

さて……鋼皿が嫌いな料理は何だろうか？

[illegible]

そして大方、食事が終わった頃。

まさかそんな言葉が鋼皿から出るとは思わなかった。

それでこの言葉だ。

つまりこの台詞を言われたのは俺と同じ苗字を持つ、千秋である。

「またまたご謙遜を。ウチのクラスでも時々噂としてでますもん」

居ればいやでも噂になるわ。

「噂といえ<sup>ば</sup>カスも最近噂になっ<sup>て</sup>ますね」

クソバカの綱杢が何故だかわざわざこっちに話題を振ってきた。

んだが。

「誰も近付けようとはしない孤独でキザな転校生。まあでもその実態は覗き趣味の変態よね」

「変態は俺じゃない、千秋だ。履き違えるな」

「……………えっ？」

鋼皿は俺の台詞の意味が分からずフリーズして、千秋は顔を赤らめて下に俯いてしまっている。

「いやぁー絶景。面白いくらいに良い眺めだなあ、おい。」

まあそんな事はどうでもいいか。そろそろ本題に入ろうか。

「で、どうだった……………俺が作った飯の感想」

「これ、一輝先輩が作ったんですか？　ってきり僕は千秋先輩が作ったんだと……………」

両方ともに敬語を使ってくれる虎杖。いや偉い。鋼皿は是非見習うべきだ。見習え。

「ちい……………私は料理とかあんまり上手じゃなくて。一輝に作って貰ってるの。美味しいでしょ？」

「せ、先輩。冗談はよしてくださいよ。こんなに美味しい料理をこのカスが作れるわけがないじゃないですか」

「何言ってるんだよ。俺はわざわざお前が嫌いそうな料理を精一杯憎悪を込めて作ってやったんだぞ。感謝しろ」

「すいません濁川先輩。食べた料理を吐きたいのでトイレを貸してください」

「おい鋼皿。その前に一つ聞くが……………案外割と美味しかったろ？」

「美味しくない、むしろ不味かった。ゴミ溜めに捨ててある生魚のような味がしたわよ」

「おかわりしたのに？」

「してない」

「僕の分も掻つ攫っていったのに？」

「くっ……………」

虎杖も雪辱を晴らすように、鋼皿へ言う。

「っていうか取られたのに何も言わなかったのかよ……………」

「まあお前は素直に『美味しかったです。すいませんでした』って  
言えればいいんだよ」

「何で謝んなきゃいけないの!？」

俺の台詞にまさかの鋼風ブチ切れ。しかし謝るのは当然だろう。

「お前、プライドのせいでわざわざ食材を無駄にするところだった  
んだぞ。魚を取るにしろ、野菜を育てるにしろ、肉を得るにしろ、  
手間が掛かるんだぞ。本来なら土下座ものを寛容な俺は言葉で謝る  
だけで許してやるって言ってるんだ。さあ早く」

「一輝、無茶苦茶……………」

千秋が呆れる様に言うが、とにかく俺はこの鋼風に謝らせたいのだ。  
理由? そこに鋼風がいるからだよ。

S 8 (後書き)

いい加減、ゲームを始めようかな？  
いやまだか。いやもういいか。いやまだだ。

「……美味しかったです、すいませんでした」

鋼風敗北。俺勝利。

いやあ、物凄く気分が良い。余の気分は最高潮だぞ。ハァーハツハツハ！

……少し反省しようか自分。

「そう言えば一輝。なんか教室で二人に話があるって言ってたけど」  
「ん……ああ、そうだな」

千秋の発言で俺は真面目モードに入る。

……っていうか、俺に真面目モードなんてものがあるのだろうか？  
まあ、どうでもいいか。

「そういえば千秋。《完全干渉》の件はどうなった？」

「んん……あれはまだ市内にいるよ」

「ちよつと待つてよ。《完全干渉》って言ったの？」

険しい顔つきをしながら鋼風が俺に問うてくる。

「ああ。だがまあ安心しろ、お前が今危惧している事は起こってない」  
「………？ 何を言ってるの？」

「虎杖の《非観理論》は本来のコード入手法以外で手に入れただろ。それと同じ事が《完全干渉》にも起こってる。詳細は不明なんだがな」

「……僕が日記帳を見たいに、誰かが《完全干渉》が残した何かを見たって事ですか？」

「そういう事だ。つまりまあこの市内に《完全干渉》のコード使用者がいるって事になるんだが」

俺は一旦言葉を区切り、少し間を空ける。

理由は簡単。

この先の言葉はあくまで俺の予測であって確証がない。だから言う

必要が無いかもしれないと思ったからだ。

でもまあ、可能性が低いわけではない。一応言っておくか。

「この市内だけでコード使用者が6人以上いる状況になったかもしれない」

「6人以上？」

千秋が少し驚いたように聞いて来る。

「ココに居る4人。そしてこの市内にいる《完全干渉》。そして今朝方の逃走犯。誰かが逃走の手助けをした可能性があるから6人以上だ」

「……逃走犯って、朝のニュースでやってた奴ですか？」

「ああ」

虎杖の確認に、俺は短く答える。

「ちよつとニュースの記事を見ておかしな部分が有つたら調べてみたんだ。当時の大まかな状況、それと逃走犯が捕まる以前に何をやらかしたか。どちらとも調べたんだが、おかしいんだ」

「何がおかしかったんですか？」

「直観的に、おかしいと感じた」

「……カスは頭の中もすっからかんという事が分かったわ」

「一輝、もう少し論理的に考えようよ」

鋼風にバカにされた上、悟ったような声で千秋にもっともな事を言われた。

こんな屈辱は初めてだ！ このクソ野郎共が！

俺だつて論理的に考えたいが、相手のコードが分からない上に、コードによつて事実を変えられてんだから論理的に考えるのは不可能なんだよ！

比較して変わった部分を見つけるにしても、変更前の情報がない。

だから論理的に考えるのは不可！

「上等だ、この尼ども！ 証明してやるよ！」

「一輝。言葉遣いをもうちよつと考えようよ。そんな興奮しないで」

「尼？ なんでいきなりア○ゾンが出て来るわけ？」

何なんだこの女二人は！

千秋はさつきから俺を諭してくるし、鋼凧に関しては尼は隠語じゃないほうの意味なんだよバカヤロウが！

ああ、だから言うのを躊躇ったんだ。ほぼ確実にこうなるから。

「でもなんでそんな風に思ったんですか？ 直観以外にも理由があるから言っただんじゃないんですか？」

「ほぼ経験則だな」

「虎杖君、このカスを相手にしてたら自分が疲れるだけだから気を付けた方がいいよ」

この四人の中の唯一の良心、虎杖に忠告する鋼凧。

まあ確かに、疲れるだけだから反論もできない。

「ともかく、この市内にコード使用者が集まってる傾向にあるってことだ」

「あ、一輝が無理矢理話を進めた」

こら、千秋。余計な事を言うんじゃない。鋼凧が食いつくだろうが。というか、別にコード使用者が集まったとしてもこっちが不用意に力を使わなきゃお互い気付かないんじゃない？」

お、鋼凧はそちに食いついたか。よかった。

「おいバカの鋼凧。一つ良い事教えてやる」

「何？ 言ってみなさいよカス」

「ここに集まってきたているコード使用者の目的は『非観理論』だぞ。不用意とかは関係無い」

だからわざわざお前ら二人を我が住処へ招いたんだよ。

「でもそんな簡単に虎杖君が『非観理論』の使用者だってバレることとは――」

「ある。俺たちが証拠だ。コードには使用者を探せるようなものもあるんだよ」

「……………」

鋼凧が押し黙る。先程とは違って実際にそうだと分かっってしまうからである。

「まあ、俺たちは《非観理論》……虎杖の味方だ。他のコード使用者に好き勝手にはさせない」

「他の使用者を伝って、目的の人物との関係を持たれると困るからですか？」

「まあそついう事。それにお前を助けて損になるような事は無いからな」

俺はそう言い、食器を洗いに行く。

まあ今やらなくてもいいけど、俺が言いたい事は言ったからな。

後は本来の親睦を深めることを勝手に三人でしてくれや。

## s 9 (後書き)

ほら、グダってきたグダってきた。

「……………メール？」

食器も全て洗い終わり、三人がボードゲームやらランプなどをして鋼皿が大惨敗している様を優雅に眺めていると、ポケットの中で何かが振動した。

当然、振動したのは携帯なのだが……メールのやり取りをする友達を作った覚えがなければ、俺の携帯のアドレスを知ってるのは義父と千秋と外国に住んでる知り合いの程度だ。

千秋がメールをしてくるわけが無いし、義父が俺にメールをする事なんて無いし、外国の知り合いはゴミ屋敷を掃除している時にしばらくメールしないという連絡が来たし、迷惑メール対策もしているし。

俺の携帯がメールを受信するはずが無いのだ。

一応メールかどうかを確かめる為に、ポケットから携帯を出す。

確かにメールを受信していた。だが内容は、

『このメールに本文はございません』

何とも奇怪な物だった。

アドレスも俺が知るものではないし、タイトルも無い。そして本文も無い。

迷惑メールでも無いだろう。ある意味迷惑なんだが。

「おいカス」

「いきなりなんだ、クソ皿」

「これって、貴方のアドレスなの？」

そう言っただけ鋼皿は携帯画面を俺に差し出してきた。

画面に映されていたのは題名も本文も無い、俺に送られてきたのと同じアドレスのメール。

「千秋、虎杖。お前らも今メール受信したか？」

確認を取ると、二人とも頷いた。

……という事は考えられるのは三つ。

一つはこの市内の全員に同じメールが行き届いているという可能性。  
一つは俺たちが通う学校の全員にメールが送られた可能性。

一つはコード使用者にのみこのメールが行き届いてる可能性。  
多分、これしか俺たち四人の共通点は無いはずだ。

「……ッ！」

俺が思考に耽つていると、またメールを受信した。

『おめでとうございます！ 貴方は参加者に選ばれました！』

本文に書いてある文章を読んだ瞬間、直感的に俺の中で答えは一つに絞られた。

これはコード使用者にのみ送られてきたメール。

参加者……ということは何か面倒事が起こるってわけか。

そして続けて俺の携帯がメールを受信する。

『ゲームの概要説明 参加者9名のうち一人の勝者を決めるゲームです』

『参加者全員、コード、と呼ばれる不思議な力を持っています』

『参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合ってももらいます』

『参加者が死亡した場合でも、物が破壊されなければ敗退にはなりません』

『敗退条件は、ものの破壊です』

『敗者は参加者の命、それと同等の物の破壊を禁じます』

『勝者は失ってしまった大切なものを復元する事が出来ます』

『例えばそれが命であつても』

『なお参加者それぞれのコードは』

『《無影無綜》』『《非観理論》』『《否定定義》』『《完全干渉

《》』『《干渉不可》』

『《禁思用語》』『《異見互換》』『《結論反転》』『《絶対規律

《》』

』となっておりです』

『ゲーム開始時刻は明日の0：00からでございます』

『くれぐれも殺し合いと勘違いなさらないように。これはあくまで壊し合いです』

『それではご検討を祈ります』

そのメールを最後に携帯は静かになった。

しばらく誰も喋らない沈黙が広がる。何が起きているかを理解する時間である。

パニックを起こして騒ぎ出すか、冷静に判断し落ち着きを掃うかの二つに別れる時間である。

正直、鋼風がパニックを起こしてほしい。そうすればいくらでもバカに出来るから。

「一輝、どう思う？」

最初に声を出したのは千秋だった。案外、皆冷静なんだな。

「どうもクソも無いな。まず最初に狙われるのは千秋と虎杖だ」

誰もパニックを起こしそうにないので、パニックになりそうな事を言ってみたが結局誰もパニックらなくて俺は物凄く残念だ。

「《非観理論》を使ったら、何を壊せばいいかバレますもんね」

「こつちには《否定定義》がいるからな。そう言う事だ」

自分が狙われているというのに冷静過ぎる虎杖が少し心配になりながらも、一応答える。

「まあ良かったのは参加者9名のうち、ここに約半数が集まっていることだ。それだけでも相当有利だ」

「……つまり他の奴らを潰せば後は争う必要は無いつていうわけ？」

口を挟んでくる鋼風。だがまあ言ってる事は正しい。

「そう言う事。だけど不用意には動かない方がいい」

「派手に余計に動いたら、他の5人が協力する可能性があるから？」

「ああ。そうすれば不利になるのはこつちだ」

姿を隠すコード。ルールを無効化するコード。全ての事象を観測できるコード。それと千秋のコード。

これだけで他のコード一気に相手するのは無理だ。



[illegible]

「輝……？」

だから千秋、心配するな。まだ俺は正常だ。ただ嬉しいだけだ。嬉しくて嬉しく嬉しくてうれしくてうれしくてウレシクテウレシクデ、

とてつもなく気分が高揚しているだけなんだ。

「みいーつけた」

探してた者がやっと見つかって、嬉しいだけなんだ。

## S10 (後書き)

主人公発狂www

いや嬉しいだけらしいですけど、

探し物一つ見つかっただけでここまで笑わなくても、ねえ？  
これでやっとゲームに進めるよ……ハア。

## サイド

《干涉不可》は築40年以上の、周りの住民からは魔女の館と呼ばれる雑草や木々が生い茂るボロアパートにてメールを受け取った。

「……《無影無綜》？」

連続して送られてくるメールの中で、《干涉不可》の興味を一番惹いたものはそのコード名であった。

(……《無影無綜》って、どういう事？ アイツは確か………)

《干涉不可》は《無影無綜》とは面識がある。あるがしかし。

《干涉不可》が知っている《無影無綜》はもうすでに他界しているはずなのだ。

(アイツが生きてたって事……？ そうだとしたら………)

自分がこの手で《無影無綜》の全てをぶち壊してやらなければ。

最初の獲物を定めた《干涉不可》は静かに動き出す。

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「ゲームだあ………？」

雑居ビルの2階にある診療所にて《完全干涉》はメールを受けていた。

やっと仕事が終わったというのに、こんどはこんな迷惑メール。

連続して送られてくるメールが癪に障り、思わず携帯を折ってやるうかという思考まで行きついていた。

が、ある文面を見てその気持ちは消え去ってしまう。

『勝者は失ってしまった大切なものを復元する事が出来ます』

『例えそれが命であっても』

その文面を見た途端、《完全干涉》の気持ちが大幅に揺れた。

別に何か失ってしまった物が、どうしても元に戻したいものが有るわけではない。

ただこの二言が《完全干渉》の今までの人生を否定することになっていた。

だから決める。自分がこのゲームに参加することを。

勝者を出させない為に。今までの人生を肯定するためだけに。

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

《禁思用語》と《結論反転》は同じ場所でこのメールを受信した。

「……ねえ《結論反転》。手を組まない？」

そして《禁思用語》が提案してきたのが協定であった。

「何故？ お前と組んで最後まで残れたとしてもお前との潰し合いだ。意味が無い」

「こつちのコードは独りきりだと基本的に弱い。この参加者9名の中じゃ最弱を誇ってもいいくらいかも。だけどサポートに回ればまあ強い」

「……つまり、お前の為に組めと？」

《禁思用語》を睨みつけながら《結論反転》は問う。

「そつちの為でもある。もしも最終的に残れたとしたら、あとは最弱のコード使用者を潰せばいいだけ。リスクが少ないでしょ？」

「……まあ、他の使用者が単独で行動するとは限らないからな。いいだろう」

そして今、《禁思用語》と《結論反転》のコンビが結成された。

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

「『勝者は失ってしまった大切なものを復元することができます。例えばそれが命であっても』か……」

《絶対規律》は自分の胸に手を当て、メールの文面を音読する。

（もしも、これが本当だと言つのなら……本当だと言つのなら……）

失ってしまった命さえも元に戻せるというのなら、自分の望む物は一つしかなかった。

自分に一番大切なことを教え、一番大切なものをくれたあの人を生き返らせること。

自分のコードを持ってしても叶えられない儚い望みを叶えられるというのなら。

《絶対規律》は自ら進んで参加する。

■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □ ■

『参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合ってもらいます』

その文面を見た瞬間、《非観理論》……虎杖紀亜は困惑した。

（僕が命と同じくらいに大切にしているもの……それって何だ？

何なんだ？）

物心ついた頃には母親は居なく、父親も夜遅くまで働きその上転勤も多かった為、友達と呼べるような関係も作れぬまま今まで過ごしてきた。

家でも外でも独りつきり。そんな自分が命と同等に大切にしている物など思いつきもなかった。

「どうもクソも無いな。まず最初に狙われるのは千秋と虎杖だ」

一輝のその発言で自分が物思いに耽っていたことに気付いた紀亜は取り敢えずその言葉を肯定する。

「《非観理論》を使ったら、何を壊せばいいかバレますもんね」

そう自らのコード《非観理論》を使えば、自分がどんな物を大切にしているかが分かる。

しかし、そうしなければ何を大切にしているかが分からない自分が居る事がとてつもなく嫌だった。

嫌悪感に負け、紀亜は《非観理論》を使用し調べるのを止めた。

[illegible]

(ゲームなんて、ふざけてる)……

一輝への質問が終わり、鋼皿はそう思った。

正直、命と同じくらいに大切にしているものを壊し合えなんてふざけたゲームに参加はしなかった。

そんな事を考えた下郎を引きずり出して、ボコボコにしてやりたかった。

自ら行った復讐以上に酷い目に遭わせたかった。

しかし、

(……それをするには、わたしもゲームに参加しなきゃいけない……)

そして勝ち残るためには、参加者全員の……虎杖や濁川千秋の大切な物も壊さなければいけない。

どんな理由を並べようと、その行為は絶対に悪だ。  
そのくらい鋼皿も分かっている。勝ち残るためには途中で裏切るしかない。

だから決心する。自分が悪党になっても自らがしたい事をするために。

（……わたしは勝者になって、皆の壊された大切な物を元に戻して、そして主催者をブツ飛ばすッ！）

「参加者《絶対規律》か……」

⌈  
⋮  
?  
⌋

一輝がおかしい。そう千秋は直感的に思った。

自分がした質問の答えとまらない言葉を呟き、その顔は何か不気味な笑いで歪んでいる。

おそらく一輝は何かの答えに辿り着いた上で発言しているはずだ。

このゲームはそもそも出来レースだったという事なのだろうか？  
 だとしたら何故《絶対規律》はこんな酔狂なゲームをするのだろうか？

参加者全員への復讐のため？ それともコード使用者への復讐？  
どちらも千秋にはしっくりこなかった。一輝もきつとそうだろう。

何が何なのか千秋の頭が混乱し始めた時。

一輝が堪えきれなかったように笑い出した。

[illegible]

思わず、千秋は一輝の名前を呼んでいた。

どこか自分が一輝に置いて行かれているような気がして、思わず名

前を呼んでしまった。

（いやだ……………）

千秋は心の中で否定する。拒絶する。嘆く。求める。

（一輝にまで置いて行かれるのは、いやだ……………ッ！！）

## サイド（後書き）

ちよつと色々間違えちゃった。まあいいか

## 序盤戦況

「……………」

目覚めたばかりの頭で携帯の時刻表示を確認する。

現在時刻、8：46。

いつもならとうに学校にいるべき時間だ。

しかし幸いな事に今日は土曜日。俺たちが通ってるあの学校は私立校じゃないため、入部もしていない俺がわざわざ土日に行く必要は無いのだ。

しかし珍しく体が怠い。頭がまだ全然働いていない気がする。

しばらく天井のシミを数えていると下から香ばしい……………いや確実に焦げている臭いが……………：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

いや、千秋だな。

起動しなかった脳の活動が急に活発化し、いそいで俺はキッチンへ向かう。

あのダメ人間、まさか料理を作らない俺に対して、料理で故意に火事を起こして殺すなんて暴挙に出たわけじゃないよな！？

頭の中でいくら否定しても、無意識での殺人という不気味な言葉が浮かんできて仕方ない。

「千秋、何をした！？」

キッチンに行くと、顔中に煤を付けたエプロン姿の千秋が居た。

「……………ごめんなさい」

千秋は自らの罪状を告げずに、俺に謝罪の言葉を言ってきた。

取り敢えず、キッチンに燃え盛る炎は確認できなかった。

火は出てない。しかし何かを焦がしたんだろう。まあ、不幸中の幸いかな。

「ハア……………取り敢えず、お前は顔洗って来い」

換気扇のスイッチを入れ、近くの窓を全開にしながら俺は千秋に言う。

前言撤回だ。何が幸いだ。大不幸じゃないか。

よりにもよって俺の秘蔵のDVDをグリルで焼きやがったよ畜生め。そりゃ焦げる臭いがしても火が出ないわけだ！　だって溶けてんだもん！

ホントこの屁、どうしてくれようか！！

「……だ、だって……一輝が悪いんじゃない！」

「アア！？」

このクソ野郎、俺に罪を転嫁しようとしやがって。

処刑だ、死刑だ、極刑だ！

「昨日ちいが覗いた時に、そんなものを見てる一輝が悪いんだよ！」

「お前に価値が分かる物じゃねえーんだよ！」

一体、俺の何が悪いんだ？

自分のパソコンでDVDを見て、何が悪いと言った！？

俺のどこに非がある！？　むしろ勝手に覗いたうえでグリルで焼いたこのバカ野郎に全ての非があるだろ！

ちなみに、俺が見ていたDVDの内容は……パンダが生みたての実の子供を殺したり、親の酷い虐待映像だったり、まあ大雑把にまとめてしまえば動物の子供が酷い仕打ちにあっている映像の類を見ていたわけだ。

「あんなものに価値が有るわけが無いじゃん！　あんなの見たって

――」

「俺には価値が有るんだよ。お前なら分かるだろ？」

「分かるかあ！」

千秋が怒号を上げて俺の言葉を否定する。

酷いなー、この趣向を分かってくれと思ったのに。

いや、千秋のコードなら分かってしまう。

《異見互換》

相手の主観性や価値観などを解析理解する。また、相手の視界を共

有することが出来るルール。

それが千秋のコードだ。

つまり相手の考え方や判断基準を理解することが出来る。

それを使えば、俺の物の価値だつて理解できるのだ。

だがまあ、千秋はこのコードを大概、覗き見で使っている。

相手の視界を共有することが出来るルールを使い、俺を何処に居るかを確かめてパシリに使ったり、メールを見たかどうかを確認したうえで俺が無視したらしくくメールを送ってきたり、何か俺をパシリに使いたい時に何をしているかを確かめたり。

まあ、最初に俺が鋼風と虎杖に接触する前にあいつらの居場所が分かったのも覗き見のお蔭なんだが。

大体は俺をパシリに使うために乱用されているコードだ。

本当、使いようによってはコード使用者を探せたりするんだが……

使用者が残念なため残念な使い方しかされていない。

「ともかく、俺のDVD焼いた罰として昼食は抜き。決定」

「え、待つてよ！　ちい、そんな事されたら死んじゃう！」

「死ぬほど反省しろという意味だ、理解しろ」

「酷い！　最低、外道、鬼畜、下衆、悪魔あ！」

「そうだぞ、お前のお兄ちゃんは最低で外道で鬼畜で下衆で悪魔でサディストだ。よく覚えとけ」

「うにゃー！！！」

というわけで昼飯を作らなくてよかったので、しばらく俺はソファに座りながらB4ノートに色々書き綴っていた。

「ちいはお昼御飯が食べたいです。お願いします、許してください」と言う言葉をまるまる無視しながら。

ノートに書いている事は、ゲームの事だ。

よく分からないあのメールから数日。鋼風と虎杖には無闇にコードを使うなどと言っている。

《完全干渉》 《干渉不可》 《禁思用語》 《結論反転》 《絶対規律》。  
この五つのコード使用者が動き出すまでこちらは動かない体勢だ。  
無闇に動き出さなければ、こちらのコードがバレないから。

幸い、俺の予想とは違い、この中に使用者を探し出すようなコードは無さそうなのだ。

コードは大体、名前の通りのルールしかない。

《無影無綜》にしても《非観理論》にしても《否定定義》にしても《異見互換》にしても。

名前通りのルールを有している。

だから五つのコードの名前を…… まあ全て漢字だからその一字一字の漢字の意味を徹底的に調べ上げた。

その結果、二つを除いた他の三つのコードは安全と判断。

残った二つ…… 《完全干渉》と《絶対規律》の動向を《非観理論》を使って虎杖に探らせ、その結果を元に五つのコードには使用者を探し出すコードが無いと判断した。

まあ更に、こつちには《非観理論》と《異見互換》の二つがある。

両方とも情報収集に向いているコードだ。

まあ《非観理論》には観測した事象には干渉できないという規制があるが《否定定義》もこちらにいる為、規制無しで情報も集め放題だ。

となると、やはり問題は……。

「…… 《非観理論》と《否定定義》か」

問題となるのはこの二人。今は味方であるこの二人。

まあでも、幸いなのはこのゲームが殺し合いではなく壊し合いというところか。

殺し合いのゲームならばこの二人を終盤まで脱落させてはならない。死んでは困るからだ。

だが壊し合いのゲームなら、敗退したとしても援助を受けれる。死なないから。

しかし普通に考えて、自分が勝ち残りたいから命以上に大切にしてい

る物を壊させてくださいと言われて『はい、どうぞ』と言う奴なんてこの世にはいない。

つてなると必然的にあの二人とはいずれ対決することになる。

それはできれば避けなければいけない事態だ。あの二人の援助を受けなくてもいいくらいに参加者が少ない終盤でなければ対立できない。

まあ、二人の合意の上で敗退させる手法はあるが………できればそれは緊急回避の手段として用いたい。

つまり俺がこのゲームの中盤まででやらなければいけない事は一つ。一つは、あの二人のどちらかを敗退させること。しかも自らの手を汚さずに。

もしも五人の使用者の誰かを利用して敗北させるとしても、こちらが疑われないようにごく自然に立ち振る舞わなければダメだ。なんとも難易度が高いゲームだこと。

## 意志

「あ、カス」

「……………チッ」

秘蔵DVDが焼かれた2日後。まあようは月曜日。

昼休み、昼食も食い終わったしちよつと食後の運動として廊下をぶらついていたら、鋼風とエンカウントしてしまった。

よりにもよってコイツかよ。まだ千秋の方が良かった。

「カス、今わたしの事を無視しようとしたよな。おい」

「クソ風、それは大きな勘違いだ。俺はお前を無視しようとしたんじゃない。お前みたいなゴミクズだと思ったんだ」

「カスの目は節穴ということがよく分かったわ」

「俺の目が節穴なんじゃない。お前のオーラがゴミと同じなだけなんだ」

「え？ 何？ 無情に残虐にブチ殺して欲しいって？ 運が良いわね。丁度護身用に改造スタンガンを持ち歩いていたのよ」

「何だよ？ 何ですか？ お前、俺に喧嘩で負けたのもう忘れちゃったんですか？ もう一度、誰が強いか睨け直して欲しいんですか？」

「上等だよ、コラ。お前ちよつと屋上来いや」

「オオケー、分かった分かったよ。歳上に対する礼儀と作法をもう一度教えてやる」

と言う風に喧嘩を売られ、言われるがままに屋上へ来たはいいとして。

鋼風が居ない。というか予め遅れて来るからと言われてある。

あの野郎……挑発もほどにしないとお兄さんブチ切れちゃうんだよ？

「お待たせ」

ただ変化が無い青空を平然と眺めていたら、鋼風が片手にビニール袋を引き下げて屋上にやっと来た。

まだ昼食を取っていなかった、というわけなのだろうか？

まあ俺のつつちゃどうでもいい事だ。

なんて思っていると鋼風が袋の中を漁りだし、そこから一つ、おにぎりを俺へ向けて出してきた。

「一ついります？」

「何を企んでるんだ、お前は？」

鋼風が俺に向けて何かを分け与えようとしただけでなく敬語で話し掛けて来るなんて。

絶対に何かを企んでいるに違いない。間違いない！

「今から真剣な話をしたいのに、罵倒の仕合になったら会話になりませんもん」

「……なら一つ、貰っておくかな」

差し出されたおにぎりを奪い取り、十秒以内に食べ終えた。

そのな様子を見る気も無い鋼風は、俺におにぎりを取られてすぐにまた袋を漁り、コロツケパンを取り出し、食べ始めた。

自分はパンで俺にはおにぎりか。まあどっちでも良かったんだが。

「それで、真剣な話つてのは？」

「…………ゲームについてですけど、わたしの為になぜと敗退してください」

「……その話、何で千秋や虎杖にする前に俺に言った？」

返事よりも何よりも、俺はそっちの方が気になったので鋼風に聞いてみる。

驚いたのか、少しばかり目を見開きながら鋼風はパンを口に運ぶ。

「よく分かりましたね。何ですか？」

「千秋はアホだから、何かあればすぐに俺に伝えてくる。だがお前の今の話は初耳だ」

ということは千秋には伝えてない事になる。

そこから先は予測だが、おそらく虎杖に先に伝えてるとしたら、鋼  
風の中の最低優先度にある俺に話すよりも前に千秋に話をするだ  
ろう。

しかし千秋に話をしていないという事は、もしかしたら虎杖にもし  
ていない可能性が割と高い。

まあ人つてのは無意識に番付通りに動こうとしたりするからな。

もしかしたら、と思って言ったら当たっていた。たったそれだけの  
話だ。

「なんやかんやで、わたし達のグループでのリーダー格って言った  
ら貴方じゃないですか」

「そうか？ リーダーがいるグループだったらもうちょっと統率性  
があると思うんだが」

「一番リーダーっぽい人って意味ですよ。濁川先輩が頼ってるから  
でしょうけど」

「違うな。きつと俺のカリスマ性が自然と溢れ出ている結果だろう」

「……ハア………そんなわけで、一番最初に話を付けるべきは貴  
方と思ったわけですよ」

「んじゃ、一番最初に聞かれた者らしく振る舞うけども。お前は勝  
者になって何をしたいわけ？」

俺が鋼風の瞳をしっかりと見て聞くと、鋼風は視線をずらすことなく  
答える。

「こんな最低なゲームを考えたクソ野郎をぶん殴ってブッ飛ばして  
やりたいと思ってます」

「その為に、お前は他の８人の参加者の命と同等に大切にしてる物  
をブチ壊すと？」

「壊した物は、勝者の権限で全部復元させます。これが悪い事だと  
いう事も自覚して、貴方に頼んでるわけです」

「……お前、大切な物を目の前で壊される痛みを知ってるか？」

「知ってますよ。わたし、実は家族を目の前で殺された経験がある  
んです」

「そうか……………なら、なおさらだ。お前は他の８人にもあの痛みを味あわせる事になるんだぞ？」

「……………分かってます。だからこそ、そんな痛みをこれからも多く生み出す可能性があるものを潰すんです」

「その大義名分のためなら、自分がいかに悪魔や下種や鬼と呼ばれても構わないと？」

「……………その覚悟くらいはあります」

最後の言葉を言い切るまでしっかりと俺の瞳を見続けた鋼皿。

ちよつと無駄話をするが、どこかの心理学の本に『異性に嘘を吐くときは、大概の人間が相手の目を見て話をします』なんて物が書いてあった。

まあそんな余計な知識で、バカが考えたバカなりの誠意を無為にするのは可哀想だろう。

だから俺はしっかりと返事を返してやる。

「断る」

「やっぱりですか……………」

予期していたのか、鋼皿のショックはあまり大きくなかった。

「まあそんな強い意志があるなら、誰かに頼み込んで負けて貰うんじゃないくて、無理にでも勝てよ。そうじゃなきゃ、敗者がやりきれないだろ」

「そうですか……………そうですね」

心のどこかでは諦めていたんだろう。どうせ交渉相手が俺だしな。

「でもまあ……………お前の意志は少しばかり貰っていくよ」

「……………えっ？」

「奇遇な事に、俺も目の前で一度ばかり大切な物がブチ壊れたことがあるんでな。こんなクソつまらないゲームを考えるクズ野郎をぶん殴ってブツ飛ばすっていう意志くらいは、共有してやるよ」

そう言いながら、俺は鋼皿に手を振りながら屋上を後にする。

## 意志（後書き）

ダラダラしてるよ、展開が。  
つまらん。ggggは好きではないぞ。俺。

## 覗き

今、俺は無謀な挑戦をしようとしている。

それは《無影無綜》を最大利用した作戦……その名も、NOZOK I。

まあ簡単に言えば、変態行為をするだけなんだけどな。

「で、なんで僕まで呼ばれたんですか？」

「当然、当作戦には《非観理論》の協力が必要だからだよ虎杖君」

「いやですよ僕は。鋼風や千秋先輩とかに殺されるのは」

「鋼風は大丈夫だ。アイツはコードを無効化できるがコードが使用されてるかどうかまでは分からない」

「でも千秋先輩が」

「そう問題は千秋なんだよ」

千秋のコードは《異見互換》。

視界を共有できる、という厄介なルールがある。

このコードによるバレを防ぐ手段は二つ。《否定定義》による無効化と本人がコードを使用していない時しか思いつかない。

《否定定義》……鋼風梓美の協力を借りれない今、千秋がコードを使用しないように祈るばかりだ。

「一応、今朝のうちにコードを使用するなどは千秋に言っておいたが……アイツが俺の言いつけを守るとは思えない。この前だって、勝手に覗かれてDVDを一つ失ったからな」

「そもそも、千秋先輩のコードがあれば覗き放題なんですけどね」

「んなもんは分かってるさ。しかし俺たちでやるしかないだろ？」

「すいません一輝先輩。勝手に僕を人数に含めないでください」

「なんだよ虎杖、ノリが悪いな？ お前は女の半裸を見たいとは思わないのか？」

「いや、そんな事はないですけど」

「なら何故!？」

「……正直なことを言いますけど、着替える女子はそこまでエロくないですよ？ 冬場だと特に、体育の授業でもジャージ着たりしますからなおさら」

「……………」

「そんじゃ僕、帰っていいですか？」

「いや、ちよつと待て！ まだだ！」

「いやもう、さっき心の中で僕の言ったこと納得したでしょ？」

「ぐう……………」

「大体、コードの乱用するなって皆に言っておいて覗きのためにコード使ったことが知れたら。綱風に今まで以上に軽蔑されますよ」

「コードは私利私欲のために使うものだ」

「……一輝先輩って、そこまで変態でしたっけ？」

「んー……まあ、男はみな狼だからな」

「意味分かりませんよ」

仕方ない、それじゃネタバレするか。

「千秋には、そろそろ仕掛けるからコードを使うな、って言うておいたんだ」

「そろそろ仕掛けるって……ゲームの事ですか？」

「ああ。まあだから《非観理論》と《無影無綜》を無駄に使用して、相手方を誘き出させて貰う」

「だとしても、何故に覗きなんですか？」

「ド派手な事件を起こすよりかはマシだろ？」

「まあ、そうですね……覗きじゃなくたっていいじゃないですか」

「《無影無綜》と《非観理論》の共通点は、相手に見えないってことだ。そこで問題。男が姿を消せる力を持ったとして大半のド変態は力をどうしようする？」

「覗きつてことですか……………でも僕、ド変態扱いされるのが非常にムカつくんですけど」

「まあド変態とかは置いといて、正直な所、相手に俺を《非観理論》の使用者だと思わせたいんだよ」

虎杖が怪訝そうな表情をしたので、追加で説明する。

「俺の《非観理論》の使用者だと勘違いしてくれば、そのコード使用者は無駄足しか踏めない」

「《無影無綜》で命より大切な物を隠されてしまってるから？」

「そういうことだ。俺を殺そうとしてもそう簡単には殺されないからな。時間が稼げる」

「でも《非観理論》なら、どんな奴からでも簡単に逃げ出せると思うんですけど」

確かに《非観理論》は、全ての者に観測されないというルールもある。

しかしだが《非観理論》を捕まえる方法などいくらでもある。

「お前はあくまで観測されないだけで、その場から消え去ったわけじゃない」

「そうですね、どちらにしろ認識されなきゃ捕まらないじゃないですか」

「それじゃ考えが甘いって言うてるんだよ。実際に証明してやる、ちよつと来い」

不服そうな顔をしながらも虎杖は俺の後に付いて来た。

——計画通りッ！

「いやまさか、一輝先輩の口車に乗せられて加担するとは思いませんでした」

「口先の魔術師になれるとは思わないか？」

「同じイニシャルだからってあまり調子に乗らないでください」

虎杖は無表情ではあるが声に怒りが含まれる。

まあまあ、保健室だから良いじゃないか。

しかし、まさか今日という日に検診があるとは。なんたる偶然。ご都合主義。

「あ、入ってきましたよ」

おうおう良い眺めじゃ良い眺めじゃ……ん？

そろそろ保健室に入ってくる女子たちの中に、鋼凧と千秋を発見。あ、やばい実験中止だ。バレる可能性が高いとかそういうのじゃない。死ぬ。

しかし、俺は《無影無綜》で姿を消している。虎杖に脱出の合図を送りたくとも送れない。

さて……どうする？ 虎杖を置いて俺だけ脱出するか？

いや、そんな外道なことは………。

「……一輝？」

千秋に名前を呼ばれた瞬間、背筋がゾクツとなった。というか死亡フラグだ。回避不可能な死亡フラグだ。

「どうしたんですか濁川先輩？」

すぐさま鋼凧が千秋に問う。っていうか問うな！ やめろ、俺をそこまで殺したいか！？

「ん……何でも無い。気のせいだと思う」

まさかのフラグ回避！？ いや、千秋のバカさ加減に感謝する日が来るなんて。

「はい、それじゃあ上脱いでね」

保険女医がそんな指示を出す。俺は鼻を押さえる。

いや、ただ千秋の無駄に豊かに育った爆弾の対策だ。千秋ということとを忘れれば意識と血液を持ってかれちまう。

## 覗き（後書き）

タイトルからして、酷い。  
いや俺酷い。凄く酷い。発想が酷い。全て酷い。人格が酷い。

## 直前回避

引き続き、保健室にて。

出血はせず、どうにか二人とも生き残っている。

しかしそろそろ外に出なければ、鼻から出血されてしまう。

それにしても虎杖の奴、一切表情は変えずに鼻だけ押さえて……ムツリか。

「ムツリとかそういうのどうでもいいでしょ」

まあそうだけでも、こういう覗きをしているのに表情を変えないのは不気味だぞ？

「覗きをしたくてしてるわけじゃないんで」

だったら部屋を出てけよ。このムツリスケベ。

「一輝先輩、マジで一発殴らせてもらってもいいですか？」

………なんて、何故か俺は一言も発せずに、虎杖との会話が成立してしまった。

それ程に、覗きという文化は男子にとっては共通語なのかもしれない！

しかしそれにしたって、千秋のが目にはらついて仕方が無い。

意識はしないようにしているんだが………クソ、アイツいつから

あんなに大きくなってたんだ？

「あ、次は千秋先輩の番ですね」

………ちよつとついて行くか。

「行くって……いきなりどうしたんですか？」

お前、少し女子の胸やら脚やらを見た瞬間は興奮したけど、もうそろそろ飽き始めただろ？

だから少し気晴らし程度に動こうじゃないか。

「……まあ、どんな理由であれ、ここから動けるのは幸いですね」というわけで千秋のあとをテクテクとついて行く男子二名。

よくよく思ったら、ひっそり隠れることなく見ているんだよな俺た

ち。

コードというのは全くもって便利なものだ。

「……一輝先輩、あれって」

そして千秋の後について行った結果、俺たちが目撃したのは……検診で来た医師が、男だということ。

……。

このクッソ野郎がああああああああああッ！

俺たちのようにコードを使わずとも覗き放題だというのは……か！ ええ！？

こんな覗きの方法……おかしいだろうが……ッ！

こんな方法……卑怯だろうがぁ！

あの男医師、今すぐにブッ飛ばしてやる！！

「一輝先輩、落ち着いてくださーい」

冷やかな声で虎杖から抑止される。

お前は……許せるというのか！？ この男医師を！

俺たちのようにこそこそと覗き見るのではなく、堂々と女の半裸を見れるこの男を！

「いや僕たちも割と堂々と覗いてますよ？ 普通なら犯罪ものを堂々とやってのけてますよ？」

んな事はどうでもいいんだよ！ 感情論、気持ちの問題なんだよ！

「バカは黙って覗いておけばいいんですよ」

それでも俺はあの男医師が許せない……ッ！！

しかし無駄に自分の姿を晒そうものならすぐに教育指導になつてしまふ現状なので、虎杖の言葉に従って俺は戻って女の半裸を舐め回すように観まくっていた。

しかし普通おかしいだろ。

こういう女子の検診の時は、大概女医がやるもんじゃないのか？

まあ俺は、女子じゃないから分からないが。普通に考えて男医師に診てもらうよりも女医に診てもらった方が同性として安全するんじゃないだろうか？

最近はやつとしたことでセクハラになるような世の中だ。

こういうのも、ここにいる生徒の誰か一人が親に言つて、そして親が学校側に文句を言う可能性だってある。

だからこういうのは普通、俺の考えだと、女医がやるというのにあの男医師は！

野郎……思い出しただけでムカついてきた。やっぱ一発ぶん殴つてやろうか？

大体、今日の検診だつてなんでこんな冬場にやるのかって話だ。

そもそも何の検診なんだよ？ 千秋がどこか不健康だつていう話は聞いたことがないぞ。

いいや、そもそも最近は俺がアイツの生活を管理してやってるから不健康かどうかは医者よりも俺の方が分かると思う。

そして俺の見立てじゃ、千秋はどこも不健康じゃないと思う。

なのになんで検診？ 健康検査で一度引つ掛からないと検診にはならない。

確かに春頃に、少し体調を崩してて検診に引つ掛かったというのなら納得いくが。

何故、春に行われた検査の再診が、秋の暮れなんだ？

偶然？ ご都合主義？

それは本当に、俺に合した都合だったのか？ 俺に合した偶然だったのか？

いやそもそも誰かが何かに合わせたんじゃないのか？

例えば……そう。

鋼風梓美と濁川千秋の両名はコード使用者でとあるゲームの参加者だ。

そのゲームが開始されたのはつい最近。

ゲームでは使用者の命と同じくらいに大事な物を壊し合うというものだ。

だからこそ使用者の両名は常にその大事な物を持ち歩いているはずだ。

そこで例えばこんな検診中。教室にその大事な物を置いておけるだろうか？

学校の治安とかは関係無しに、誰かに盗まれる可能性がある。さらには盗まれたりした時についてっかりとした事で壊されてしまう可能性も無くも無い。

だから、検診中であれ大事な物は持ち歩く。まあそれが普通だ。

そして次に、男医師についてだ。

俺の常識から言って、こういう女子の検診は男医師ではなく女医がやるものだ。

なのに男医師というのは少し学校側にとってもリスクを生じる部分がある。

だがしかし、世の中には学校側にそのリスクを忘れさせる方法がある。

いいや、その方法を使えば無理にあるはずのない検診をでっち上げる事も可能だ。

その方法の名を……………俺たちはコードと呼ぶ。

「ッー!!」

「きゃっ!?!」

覗きによって心が通い合った虎杖が、千秋を無理矢理その場から突き飛ばす。

俺は姿を晒し、保健室のドアを《無影無綜》によって消し去る。

さあて、こっちが仕掛ける前に相手方が接触してきやがった。壊し合い開始だ。

## 直前回避（後書き）

……あるえ？

おかしいな、ついさっきまで覗きをしてたスケベな話だったのに。  
何があっただろう？

## 作戦会議

姿を晒すと言つても、そんないつまでも晒していたら「きゃー、覗き魔！」と善からぬ称号を貰つてしまう。

そんな称号は貰いたくないので、一瞬でドアに触れ、そして自分の姿と保健室のドアを消した。

そしてそのまま敵前逃亡！　だって、一瞬であれバレたら逃げるが覗き魔の常識だから！

「……あのカス野郎！」

俺の姿を一瞬捉えてしまった鋼風は、追う様に保健室を出る。

虎杖も《非観理論》で隠れたまま、保健室を出る。

「待つて、梓美ちゃん！」

千秋は多分、冷静に状況を把握し、いきなり出て行つた鋼風を追う様に、自然と保健室を出る。

これで、全員逃亡は成功だ。

次に考えるべきは、相手のコード。

学校側の人間に無理に検診を設けさせ、さらには女医ではなく自分を推薦させるようなコード。

簡単にまとめれば相手の思考を捻じ曲げるコード。

九つのコードの内、そう言ったことができるものは《完全干渉》《絶対規律》《結論反転》の三つ。

……と言つても俺が勝手に予測したルールでの判断だが。

まあ後で虎杖に《非観理論》を使って調べさせればいいことだ。ということとは、四人で一度合流しなければいけないか。

保健室から一定距離以上を離れたので、立ち止まり、姿を現す。ポケットから携帯を取り出した直後、誰からか着信する。

と言つても誰だかは分かっている。千秋からの電話だ。

「千秋、無事か？」

『一輝こそ、敵に捕まつてない？』

「敵に捕まる前に、教師や鋼凧に捕まりそうだ」

『これにこりたらコードを乱用して覗きなんてしないこと。分かった？』

「お前に、お前のコードだけでは言われたくない」

『まあ、確かにね』

「特別教室棟の2階と3階の間にある踊り場。他の二人にメールで伝えておいてくれ」

『分かった』

千秋がそう言うと同時に電話を切る。

まだ一番最後に出たはずの千秋が捕まっていなかったとなると、まだ相手は動き出していないのか。

一応、医師と来たから仕事は最後まで責任もってやるつもりとかか？  
つまりそれは最後まで他の女子の半裸を見続けるってことかこん畜生絶対にごん殴ってやる。

息継ぎせずに男医師（仮名）への怨念を再確認しながら、俺は自らが指定した集合場所へ向かう。

「覗き魔」

鋼凧は集合場所についた瞬間に、それより前に来ていた虎杖と俺に向かつてそう言った。

「いや僕は一輝先輩に無理矢理連れて行かれただけで——」

「そうだぞ。虎杖は女子の半裸を見たって表情一つ変えないムツツリスケベなんだ、責めるなよ」

「一輝先輩一発ごん殴ってもよろしいでしょうか？」

鋼凧がジト目で虎杖を見るからって、俺に八つ当たりすんなよ。

「変態、最低」

鋼凧は最後にそう言い、それ以降口を閉じてひたすら男二人を睨み続けていた。

「ちい……私が最後かな？」

「ああ。そうだ」

千秋の到着と同時に、作戦会議に移る。

「虎杖、鋼風は《非観理論》であの医師が誰だか調べてくれ」

「分かりました」

鋼風は返事をせず、虎杖だけが返してくる。まあ実質、調べるのは虎杖だけだからな。

「千秋はコードを使うな」

「何で？」

「俺の予測だと敵は《完全干涉》《結論反転》《絶対規律》の三つのうちのどれかだ。《完全干涉》だった場合、逆算されてお前のコードがバレるかもしれない」

「分かったけど……私に何かできることがある？」

「《完全干涉》じゃなきゃ、有るんだが」

「残念ながらその《完全干涉》がああ男医師のコードみたいですよ」  
調べ終わった虎杖が、そう答える。

《否定定義》によって《非観理論》の規制が解けたからなんだが……この連携は痛手になるかもな。

「なら今回は《無影無綜》《非観理論》《否定定義》の三人でいく。千秋は……まあ、お留守番でもしてろ」

「一輝、言い方が酷い……」

まあでも仕方が無いだろ。今回のスタメンではないんだから。さて、スタメンのスタメンによるスタメンのための戦略を立てようではないか。

「鋼風、《完全干涉》のルールについて教えてくれ」

《否定定義》と《非観理論》は過去に《完全干涉》と対峙したことがある。

……と言っても、あの男医師と対峙したわけではないんだが。取り敢えず、誰が使おうとも《完全干涉》は変わらない。

「……自分を中心とした半径20メートルの範囲を5分間、干涉できるってルールよ」

「他に特典は？ 《非観理論》みたいな規制とかそんな感じの」

「特には。ただ《非観理論》の他者から観測されないってルールが通じるから……多分、カスの《無影無綜》によって消し隠れるルールも通じると思う」

「そうか、それは朗報だな」

「でもわたしと虎杖君の二人だけで十分よ。一度《完全干涉》を潰したことがあるから」

「いやでも――」

「確かに、虎杖君は覗きをした。でも本人の主張だとカスに嵌められたからだと言ってるの。それに間違いはない？」

「ええ、まあ」

「そう。じゃあ覗きの主犯格であるカス野郎はここで地に這いつくばるように土下座しながら反省してなさい。濁川先輩、監視お願いします」

「うん、任せておいて」

「それじゃ、行ってきます」

「行ってきます」

「行つてらっしゃーい」

……えっ？

え、何？ 何が今この場で起こったの？

もしかして俺、鋼凧に言いくるめられて、置いて行かれた！？

「一輝」

俺の肩に手を置いた千秋は一言。

「土下座」

つまり本当に俺は鋼凧のようなバカに言いくるめられて、義妹の前で土下座をしなければならぬピンチに陥ったということか。

いやまあ、悪いのは全部俺だから仕方が無い様な気もするんだけどね。

## 作戦会議（後書き）

まあ、覗きは犯罪ですもんね。

コードとかいう異能とか関係無しに土下座するべきですよね。  
主人公とか関係無しに。

## 説明不足

《完全干渉》……………はるなが ひさめ春永氷雨は、未だ保健室にて検診を続けていた。

本来なら、《異見互換》もしくは《否定定義》を捕え、命と同等に大切にしている物を破壊しているはずだった。

しかしそれよりか前に、《無影無綜》と《非観理論》が動き出してしまったため計画は中断。

彼らが保健室を出た時、無理に追いかけることはできかた、それをすれば氷雨の大切な誇りを穢してしまうため、仕方なく検診を続けていた。

保健室にいた女子生徒も女医も《完全干渉》によって記憶を改竄され、四人……正確には、姿を現した三人が保健室に居たことを忘れてしまっている。

無駄に騒がれても困るのは氷雨自身だからだ。

四人に脱出されてしまった今、氷雨の最速で最適な行動は、検診を終えて四人を追うこと、である。

機械的に女子生徒を診ながら、少しばかり氷雨は後悔していた。

検診に來た医師、という設定でなければ氷雨はすぐに彼らを追うことができた。

しかし医師という設定が、今氷雨をこうして保健室に縛り付けている。

最後の女子生徒を診終わると同時に、氷雨は《完全干渉》によってまた記憶を改竄し、すぐさまに保健室を出る。

《完全干渉》のデフォルトでの干渉範囲は20メートル。

おそらく彼ら四人全員がそれよりも離れた場所に移動したはずだ。

しかも《完全干渉》のデフォルトでの干渉時間は5分。

氷雨のコードは最大5分しか使えず、しかもコードの使用を止めたからといってまた5分使えるわけではない。

氷雨本人にもいつコードの制限がリセットされるのかはイマイチ分からないが、夜寝て朝起きたらリセットされていた。

睡眠を取ればリセットされるのか、それとも24時間でリセットされるのか。

それは分らないが、取り敢えず今は関係の無い話だ。

ともかく《完全干渉》を無闇に多大に使用することはできない。

記憶の改竄も一瞬でやってのけたことだ。もう二度と使いたくはない。

……いや、無闇に多大に使用する必要は無さそうだ。

二人が……《非観理論》と《否定定義》の二人がわざわざ自分の元に來たのだから。

~~~~~時間は少し前に遡り~~~~~

「あれ？ 一輝、土下座しないの？」

「するか、するわけないだろ」

踊り場に残された俺と千秋。まあくだらない雑談をするしかないわけですよ。

「っていうか一輝、どこ行こうとしてるの？」

「戦の地だよ」

「二人の後を追うってこと？ 確かにちよつと心配だけど」

「心配の域を超している。危険だ」

俺は断言する。断言するに足りる根拠もある。

「《完全干渉》は俺たち四人のコードをもつすでに知ってるはずだ」
「……知ってしてるからこそ、ちいと梓美ちゃんを狙ったの？」

「鋼凧はコードが発動されることに気付かなければ《否定定義》を使わない。千秋の《異見互換》は攻撃性が一切ないコードだ。《無影無綜》で隠れられたり《非観理論》で予知されて逃げられるよ
りか、全然捕え易い」

もしも俺と千秋、鋼凧と虎杖のコードが逆だったら、女子ではなく男子の検診になってただろう。

あくまで俺の予測ではあるが。

「でも、今は梓美ちゃんだって警戒してるわけだから《否定定義》も使える。さつきよりか安全だと思うよ」

「どうだか」

千秋の言った言葉は半分正しい。でも半分は間違ってる。

「さつきまでは気付かれずにコードを発動して二人を捕えなきゃいけないかったが、今は違う。ド派手にコードを使ってくる。《完全干涉》は時間制限のあるコードだ、ド派手にコードを使った方がやり易いに決まってる」

「でも二人は、一度《完全干涉》を倒したことがあるんだよ？」

「それが油断に繋がる」

というか、多分もう鋼凧と虎杖は油断している。

さっきの《完全干涉》の説明の時に、言い忘れた事が多分あるからだ。

「《完全干涉》は自分を中心とした半径20メートルの範囲を5分間、干涉できるってルール。それは分かった。けどその干涉範囲は常にそうなのか？ 干涉時間は常に5分なのか？」

「……あ」

そんな事は鋼凧は言っていなかった。俺にそんなことは説明しなかった。

まあ、元々俺を戦いに参加させる気が無かったからかもしれないが。

「多分、鋼凧はそれぞれ最大範囲、最少時間で答えたんだと思うが

……そこら辺が油断の元だ」

「なんで？」

「その情報は《非観理論》で調べた信憑性が高い情報ではない可能性がある」

「……？ どうしてそう思うの？」

首を傾げながら千秋が問ってくる。

「俺が鋼風に《完全干渉》のルールについて聞いた時、鋼風は一切虎杖に確認を得なかった」

「それは、梓美ちゃんが《完全干渉》のことを虎杖君より知ってるからじゃ？」

「虎杖より詳しいわけないだろ。《非観理論》は全ての事象を観測できる、言ってしまうえば辞書のようなものなんだから」

辞書よりも、ネットよりも、パソコンよりも、人間の脳が記憶という概念で勝るわけがない。

「鋼風は虎杖に一度も確認を得なかった。そして虎杖は一度も説明の時に口を挟まなかった。だからもしかしたら……《非観理論》で《完全干渉》のルールを調べてないかもしれない」

「それって……考え方によってはピンチじゃ」

「ピンチかもじゃなくて、ピンチなんだよ」

鋼風は最大干渉範囲が20メートルだと思っている。

しかし、もしかしたら、場合によっては、その情報は偽である可能性がある。

いや、偽であろうが真であろうが、このままだと鋼風たちは負ける。

「千秋、あの二人は今どこにいる？」

「……保健室近くの廊下……もう《完全干渉》と対峙しちゃってる」

もう対峙しちゃってる、か。

……チャンス、良い機会かもしれない。

《非観理論》も《否定定義》もいずれ敵に回ってしまうコードだ。

もしここで《完全干渉》によって大切な物を壊され、敗退してしまったとしても、殺されない限りは二人の協力を後々も得られる。

つまりここは、序盤戦の山場かもしれない。案外早いものだ。

この戦いで、最低限二人のコード使用者が敗退する。

未確定のこの結果を確定させるには、俺の援助は少し遅らせなければいけないかもしれない。

考えがまとまると共に、俺の進路を邪魔するものを《無影無綜》で

消し去り始める。

説明不足（後書き）

最低ですよねこの主人公。ホントマジ最低。
クソってくらい最低、外道、下種のカス主人公ですよね。

対戦

「虎杖君、事前に確認しておくけど……《完全干涉》の大事な物つて何？」

「……………免許証、紙の医師免許証だ」

「何でそんな物が？」

「大切な物なんて人それぞれだろ」

そんな話をしているうちに、僕と鋼風は《完全干涉》の前に着く。

「……そっちから来るとは、楽で助かる」

そう言々と共に、男医師は片腕を振るう。

それに伴って、無数の氷の針（？）のようなものが現れ、こちらに向かつて猛スピードで……ってヤバッ！

鋼風も僕も、頭を抱えながらしゃがみ込み、どうにか氷の針をかわす。

「鋼風！ 何でコードを使わなかったのさ！？」

「何を否定したらいいか分かんなかったのよ！」

そうだった、鋼風はそこまで頭の回転が速いわけじゃないんだった。それに僕も何を否定したらいいか分からない程、テンパっていた。奇襲なんてされるとは思ってたから。

これは自分の考えの甘さのせいだな。

「虎杖君、わたしがアイツに突っ込むからサポートよろしく」

「……鋼風、分かっているとは思うけどこの前の《完全干涉》とは違つて——」

「分かっている。殺す部分を身包み引っぺがして免許証を取るっていう風に変えればいいんでしょ？」

ダメだ、鋼風は力押しでこの勝負を終わらせる気だ。違いを少ししか分かってない。

しゃがんでいた姿勢からクラウチングスタートのように突撃する鋼風。

干渉範囲である20メートル圏内に入って2秒後。

「1秒後、両側から氷の壁で押し潰される」

「否定」

鋼風の声と共に、微かに集まり始めていた水蒸気が元の場所へ霧散する。

「1秒後、左膝を狙って氷柱が地面から突起する」

「否定」

直後、床に凍りそこねた水蒸気が水分となって水溜りをつくりだす。

「2秒後、右肩、左胸、腹部、左脛、右踝を狙っての氷柱と天井が崩落」

「全否定」

水蒸気は元の居場所へ戻り、崩れかけた天井は普段通りのヒビが入っていない状態へ戻った。

これが鋼風と僕の作戦。

《否定定義》はコードなどを無効化するという強力なものだが、鋼風自体は、駆け引きや相手の行動を読むことを苦手としている。

得意なものは《否定定義》を使った力押し。ゴリ押し。猪突猛進。

だがまあ、そんなことをすれば半径20メートル以内を自由に干渉できる《完全干渉》にあっさりとやられてしまう。

それを避けるため僕は《非観理論》を使って、《完全干渉》が鋼風に仕掛ける攻撃を全て先読みし彼女にそれを口頭で伝える。

その攻撃を鋼風はただ否定するだけ。それだけでコードを使った攻撃全てが無効化される。

ある意味凄く恐ろしい。相手の策略や思惑を全て跳ね飛ばし、相手の元へ辿り着いて止めを刺せるのだから。

この鋼風の猛進を止める術はただ一つ。僕を口を塞ぐ……ようは僕を潰してしまえばいいのだ。

しかしそれも叶わない。

何故なら《非観理論》には他者から観測されないというルールがあるのだから。

観測できなければ、干渉できない。つまり《完全干渉》は僕個人に攻撃をするどころか、僕がどこに居るかも分からない。

僕が干渉範囲である20メートルに入っても気付かれることは無い。だから鋼風への僕の予知が途切れることはない。

この作戦、僕もちよつと走らなきゃいけないくて疲れるけど、確実に《完全干渉》を倒せる。

鋼風の猛進を止める術はもうどこにもない。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

氷雨はなおも鋼風へ攻撃を仕掛けながら、冷静に状況を分析していた。

こちらの攻撃はどんな死角や大量に同時に仕掛けても全て無効化されてしまう。

先程から氷雨には鋼風の「否定」という言葉しか聞こえないが、それは多分、観測されないルールを使用されているからだ。

つまり正確に言えば、こちらのどんな攻撃も全て予知され、全て無効化されているというわけだ。

まったく小賢しい……。

氷雨は苛立ちと忌々しさを感じて少し嘆息を吐く。

鋼風の聴覚に干渉し、虎杖の声を聞けなくしてしまおうか。

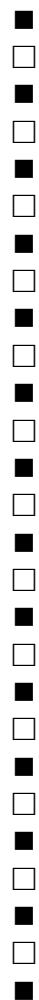
……ダメだ。聞こえなくなった瞬間にすぐさま無効化されてしまう。鋼風の周りの音に干渉することも無駄な足掻きだ。

虎杖本人に攻撃を仕掛ける事すらできれば、鋼風を打ち取ることなど容易いのだが……。

本人を観測できなければ、干渉する事も叶わない。

……いや、一つだけ虎杖に干渉する方法がある。

虎杖個人を干渉することが不可能ならば、全てを同時に干渉すればいいだけだ。



「……………」

鋼凧に対する攻撃が途絶えた。

諦めた……いや、そんな簡単に諦めるわけがない。

……もしかして逃走経路を確保しようとしてるのか？

そう思い、僕はすぐさま《非観理論》を使って相手の行動を未来予知をする。

それを行った事は間違いでは無かった。でもタイミング的には遅かった。

「虎杖君………」

指示が途絶えたことによって、鋼凧がこちらを向いて僕の姿を確認しようとする。

それと同時に、《完全干渉》が片足で思いっきり床を踏む。

「鋼凧！ アイツ、干渉範囲全体に氷柱で攻撃してくる！」

対戦（後書き）

氷雨の考えを補足すると「取り敢えず全部攻撃すれば、当たるだろうってことです。」

言い換えるなら、下手な鉄砲数撃ちや当たる。

周りに迷惑が掛かりますので、皆さんは真似しない様にしてください。

敗退

「ッ否定！」

僕の声と《完全干涉》の全域攻撃はほぼ同時だった。

それでも僕たちに攻撃が届くよりも鋼皿のほぼ反射的に発動した《否定定義》が無効化するのが早かった。

力押しの人達だけはある。僕なら絶対反応できなかった。

しかし油断するのはまだ早かった。

「がら空きだぞ、《非観理論》」

《完全干涉》のその一言で、僕は自分の過ちに気付く。

僕は元々がら空きだ。何故ならそれは他者から観測されないルールを発動しているから。

それゆえに干涉もされない。だからその言葉は僕ががら空きだという事を示しているのではない。

示しているのは、僕の——指示が、がら空きだという事だ。

「ッッッアあああああああつ！！！！」

なんと言えがいいのだろうか？ 上手い表現が思いつかない。

氷の牙のようなもので両足の肉を噛み潰された鋼皿は悲鳴を上げながらその場で倒れ、仰向けになって足を押さえる。

直後、干涉によって無理矢理作られた氷柱が鋼皿の両太ももを貫く。

「あッッッッ！」

悲鳴にならない、まさしく絶叫を上げる鋼皿。

もう《否定定義》も機能していない。それは多分、彼女の脳が激痛の処理で埋め尽くされてしまったからだろう。

確信はある。

僕が誤って《非観理論》を使って鋼皿の未来を予知してしまったから。

もしも《否定定義》が機能していれば、まだ僕は《完全干涉》を止める事が出来た。

でも出来ない。機能していない。故に僕は、言動も行動も禁止された……ただの傍観者となることしかできない。

今考えれば、全て僕の油断が悪い。

僕が全域攻撃を予知することも、それを鋼凧によって無効化されることも《完全干渉》には分かっていたはずだ。

《完全干渉》が狙ったのは、僕の油断。そして鋼凧梓美。

始めから僕に攻撃を加える気なんて無くて、僕の指示が途絶えることを狙っていたんだ。

「さあて」

《完全干渉》……春永氷雨が、空間に干渉し、一瞬で鋼凧の前に移動する。

脚の傷口を踏みながら、氷雨は言葉を続ける。

「まずは《否定定義》が大切に行っている物から丁寧にぶっ壊させてもらいますか。ああー、安心しろ。疵の痛みでろくに喋れないお前に問い質したりはしない。お前の脳味噌に聞くとするよ」

言葉の終わりと共に、氷雨は鋼凧の頭蓋を鷲掴みにして《完全干渉》を発動。

脳細胞の記憶領域に干渉し、彼女の記憶の中から大切な思い出を調べ漁っていく。

その思い出の中で一番印象に残っている物が今何処にあるかを脳内検索する。

そういった風漬しの方法を5秒続けたところで、氷雨は呟く。

「制服の、ポケットの中ねえ……………」

鋼凧の体に手を伸ばし、制服のポケットの中を漁る。

そうして出てきたのは、四葉のクローバーのヘアピン。それが鋼凧が自分の命と同等なくらい大切にしている物。

「死んだ家族との思い出の品か。命と同じくらい大切な思い出の塊……壊したくは無いなえ」

氷雨はそう言うが、本心から出た言葉ではない。だからといって全てが嘘のわけではない。

少し……心の片隅程度にはそのように思っている。だがあくまで心の片隅。

どうでもいいようなことなのだ、氷雨にとっては。

《非観理論》を使えば全てが観測できる。

激痛で言葉を出せない鋼皿が、今どう思っているか。

掌で取ったヘヤピンを弄りながら、氷雨が何を思っているか。

これから起こる、鋼皿のヘヤピンの運命。

全てが分かる。全てを観測できる。だが今はこんな異能は必要ない。言動、行動によって事象に干渉できないこんな異能は今はいらない。持つて必要ない。

今こうして痛みに苦しんでる鋼皿を、大切な思い出を壊されようとしている鋼皿を救えもしないこんな異能はいらない。

なのに、僕の願いは神様どころか悪魔さえも無視をする。

「ま、大切な物が壊される瞬間だ。よく見ておけよ、お嬢ちゃん」
そう言つて氷雨は、鋼皿の目の前でヘヤピンを真つ二つに折ろうとする。

せめてもの、最後の抵抗として鋼皿はその光景から目を逸らす。正確には目を瞑る。

いかにも鋼皿らしい行動だ。

だけどそんな行動も無意味に変わる。

「そうか、見るのは嫌か……じゃあ」

鋼皿の顔の近く……耳の近くにしゃがみ込んだ氷雨は言葉を続ける。

「よく耳に焼き付けて……そうだな、音だけでその光景をイメージできるよに壊してやるよ」

どうやってそんな事をするのか。

簡単な方法だ。脳細胞の一部を組み換え、その音とイメージした光景を死ぬまで焼き付けるように記憶させるだけである。

《完全干渉》からしたら、そんな事するのは造作もないことだ。

「それじゃ、これでお前はゲーム最初の敗北者だ」

「やああああああああああああつ……」

その言葉に伴い、ヘアピンを綺麗に真つ二つに折る。

ただ折っただけではない。鋼凧の本当に最後の足掻きである絶叫を含めた余計な雑音をキャンセリングして、その音だけを聴覚に聞きとらせた。

そうして最新のヘッドホンよりもクリアな音を聞いた鋼凧は何を想像したのか。

それは何かの画像に映された、幼い時に両親と過ごした記憶が、画面ごと真つ二つに割れ、崩れ去るといったものだった。

敗退（後書き）

何か鬱っぽいような感じだった気がしなくもないんだけど。
いやまあ、全然こんなの鬱じゃないよね。そうだよね。
こんなので鬱っぽいなんて言ったら、誰かに怒られちゃうよね。

撤退

《完全干渉》により《否定定義》が敗退。彼女がこのゲーム初の敗者になった。

……………想定通り、計画通り、全て俺の思惑通りに動いている。

これによって高リスクだった《否定定義》と《非観理論》の片方は敗退。それも敵によって。

それはつまりこれから鋼風が得られるということ。

例えば俺が鋼風からしてみれば外道なことをやったとしても、アイツが俺を敗退させることはゲーム上叶わなくなった。

このまま虎杖も敗退させたいが、まあ、限度つてものは大事だよな。ボーナスを狙うんだとしても優先順位は《完全干渉》だ。

アイツは虎杖を敗退させた後、俺たちも狙いにくるはずだ。それはとてもリスクが高い。

俺がこのゲームで残るためには優先的に潰さなきゃいけない相手だ。さて、息巻いて勝手に戦いに行った二人組を救ってあげましょうか。まずは散々悲鳴を上げたり、絶叫したりして泣き疲れて死んだ目をしている鋼風から。

「——ッ！」

俺が指を弾くと、天井が消え、《完全干渉》の上に大量に色々な物が降ってくる。

まあ、《完全干渉》はさぞ驚くだろう。

自分を中心とした半径20メートルが干渉範囲ということは、つまりは天井のさらに上、次の階の床まで干渉できる。

それなのに、今の今まで無かったはずの物が大量に自分の元に落ちて来るんだから。

つまりそれは今まで処理してこなかったもの。

ほんの一瞬だけ、《完全干渉》は処理負荷によって反応が遅れるはずだ。

まあ処理負荷が掛からなくても、奇襲に対しては人間誰しも驚き反応が遅れてしまうものだ。

その一瞬の隙を狙って俺は姿を現し、鋼凧に触れる。

今までに一度でも鋼凧の体に触れた事があれば（救う気はないけど）一応救えたのだが、残念ながらこれが初タッチである。

これによって、鋼凧は《無影無綜》によって隠せる物の対象となった。

《無影無綜》によって姿を消し隠されたものには干渉できない。それも証明済みだ。

鋼凧と共にコードと共に姿を消し、俺はその場から逃げ出す。

順当な判断だ。鋼凧を今この場で回収するのはリスクが高いし、わざわざ鋼凧たちが《完全干渉》の相手をしているうちに罠を仕掛けただ。

そこまで誘導してやらないと、敗退した鋼凧も密かに努力した俺も報われない。

取り敢えず、一度虎杖と合流しておきたい。

まあ千秋に先程、俺のメールを転送してもらったから……まあ虎杖の精神が少しでも正気を保っていたら指定した場所に来るはずだ。取り敢えずそこまでダッシュだ。ダッシュ、ダッシュ、ダッシュ！

「よう虎杖。気分はどうだ？」

「……あまり良くないです」

俺が集合場所、特別教室棟3階の一室に来た時にはもうすでに虎杖が居た。

「鋼凧は？」

「さっきの場所だ。俺のコードで隠してあるから《完全干渉》に何かされる恐れもない」

「……………何か策はあるんですか？ 僕の予知は使えないし」

「使っ必要なんかない。これ以上長引かせるつもりもない。一瞬だ。

「瞬で《完全干渉》を片付ける」

「片付けるって……こっちはもう二人とも隠れる事しか出来ないんですよ」

「充分なんだよ。《完全干渉》ごとき、それだけで充分だ」

ごとき、は少し言い過ぎだが。

《非観理論》と《無影無綜》とさっきの奇襲と相手が人間であるっていう四つの条件が揃えば《完全干渉》は俺の策で討ち取れる。

「一応聞いておくが、お前は《完全干渉》の大切にしている物を知ってるよな？」

「ええ」

「その材質は何だ？ 金属類か？ プラスチックか？ 紙か？」

「紙ですよ」

「なら……これだ」

俺は虎杖に、ハサミとカッターを渡す。

「これでジョッキとやれ。そうすればあっちの負け、《完全干渉》は俺たちに手出しする事が叶わない」

「……これ、どこから？」

「盗むのは得意なコードなんだ」

特に深い説明をせずに、曖昧な回答で返す。

「これを持って、お前は待機場所へ行け」

「一輝先輩は？」

「俺はここで《完全干渉》を待ち受ける」

「……………分かりました」

「おいおい、反応悪いな。『そんなの危険過ぎます！』ぐらいは言ってくれてもいいんだぜ？」

「策の内なんですよ？ なら文句は言いません」

「あら、随分大人しい。鋼風に見習わせたいくらいだわ」

苦笑いをしながら、虎杖は部屋を出る。

……まあ、ちよつと鋼風のことでジョックを受けてるんだろつ。

《非観理論》は攻撃的なコードじゃない。助けたくても助けられない

くて、当然なのだ。

だからあまり気にしないほうが良いんだが……まあ俺の策の問題にならないから放置だ。

しかしまあ、少しばかり苛立つな。《完全干涉》の奴。

鋼皿にコードを使わせないために痛みを与えたのは分かるが、あそこまで恐怖を植え付けるようなことをしなくたっていいだろうが。

………ム力つく。ああいう壊し方が一番ム力つく。

思い出して、喉元噛み千切ってぶち殺したくなっちまう。

まあそんな苛立ちは、奴の驚く顔を見て、晴らすとしよう。

「ようこそ、《完全干涉》のコード使用者」

教室に入ってくる男医師の姿を見ながら、俺はそんな事を言ってみた。

撤退（後書き）

さあ、次で《完全干渉》戦は終了。
つまり序盤戦が終わるわけですよ、早いですねえ。
全然書いたような気がしないですよ。月日的に。

二人目の敗北者

「ようこそ、《完全干渉》のコード使用者」

部屋に入ってきた男医師の姿を見て、俺はそう言う。

「あれ？ 《完全干渉》を使って俺に傷を負わせたりはしないのか？」

「逃げる相手に対してはそうするが、お前は逃げないんだろ？」

「何でそう思う？」

「お前のコードを使えばそのまま味方全員姿を暗ますことも出来たが、こうして隠れもせず目の前に《無影無綜》のコード使用者がいる。誘ってると思えないだろ」

「お前を罠に嵌めたいからな。ってか本当に《完全干渉》を使わなくていいのか？ 鋼風たちとの戦いで幾分か時間を消費しただろうけど、まだ4分以上は残ってるだろ？」

「残念ながら4分以下だ」

「それでも、それだけの時間があれば俺の髑つて、大切な物を壊して、二人目の敗北者になることなんて造作もないだろ？」

「お前がその大切な物をコードで隠してなきゃな」

「痛みを与え続けたり、脳に干渉すれば、自然と誰でもコードを解くだろ」

「簡単に言ってくれる。痛みを与えることは楽勝だが、脳に干渉してコードを解くなんてのは時間が掛かんだよ」

「……………つまり、今こうして俺と会話しているのはその時間を稼ぐためか。」

「なら、暇潰しはここまでだ。こっちも策を出すとするか。」

「…………俺が、この部屋にお前を招いた理由は言うまでもなく罠を仕掛けたからだ」

「そうだろうな。しかし何時まで経ってもその罠とやらは発動しないんだが？」

「まあ、それはお前の隙を突かなきゃ意味が無いからな。お前が上に警戒しなくなるのを待ってたんだ」

「まさか、さっきと同じ策が通じるとでも思ってたのか？」

「だって苦労したんだぜ。お前が鋼皿たちと遊んでる間、俺はせつせと重たい荷物をこの上に運んで……その苦労を無駄にしたくないと思ってるんだろ？」

俺が千秋と別れた後、どれだけ大変だったと思ってるんだ。

《完全干渉》を打ち取る策を準備するのに手間取り、そして鋼皿たちがピンチになった時のためようの策を準備して。

上から色々な物を落とすという事は、それらの物を全てそこまで運ばなきゃいけないわけで。

それがどれだけ重労働だか分かるか。ゴミ屋敷を独りで掃除しきる時よりも疲れたわ。

しかもそれだけ手間をかけた策が、通じないとなれば誰だってブチ切れるに決まってる。

「余談だが《完全干渉》、この階の上は屋上だ。つまりどれだけ大量の物を置こうとも、どれだけ物を置こうともいい空間。さっきの5倍近くの物が降ってくるぞ」

そう言ってる俺は指を弾く。

パチンツという音と共に、部屋の天井が消え、大量の物が降ってくる。

当然上に警戒している《完全干渉》は、部屋の床も同時に消えたことに対して動揺をしてみよう。

重力に従い下へ下へと落ちていく俺と《完全干渉》と大量の物。

そのまま2階、1階へと落ちていく。というか残念ながらウチの学校は地下などないので、1階が終点。

受け身代わりに姿を消し、落ちた衝撃を無にする。

《完全干渉》は空気に干渉し、衝撃を全て逃がす。

だが逃がしたとしても上から落ちてくる大量の物を処理しなければならぬ。

途中、3階、2階にあった物も加わったので実際に俺が仕掛けた量の倍近くになっている。

それでも《完全干渉》にとってはそれらを蹴散らすことは造作も無い事なのだろう。

だから加えてやる。この1階に仕掛けた大量の物を出現させて、処理負荷を一瞬だけ起こす。

「ッ!？」

そしてその一瞬のうちに俺がやることは二つ。

一つは俺が奴の衣服に触れて、身包みを剥ぐ……とも言い、消し去る事。

もう一つは、上から降ってくる物全てを消し去る事。

身包みを剥いだ理由は簡単。奴が持つてゐる免許証を奪い易くするため。

降ってくる物を消した理由は二つ。

一つはまた処理負荷を起こすため。干渉中の物を消す事で、強制的に干渉取り消しの処理を大量に行わせる。

そしてその一瞬の隙について、他者から観測されない虎杖が安全に《完全干渉》の免許証を切るため。

《非観理論》は他者には観測されないが、決して姿を消したわけではない。

誰にも見られないだけ。だからタンスの角に小指だってぶつけるし、上から降ってくる物だって躲さなきゃいけない。

でも躲してたら《完全干渉》が次の手を打ってきてしまう。

だから虎杖の道を邪魔する物を全て消し去った。

あとは一瞬。

誰も気付かぬ間に、免許証はまるでハサミで切ったかのように真っ二つになって。

《完全干渉》の敗北が決まる。

皆さん、後片付けという言葉を知っているだろうか？

子供の頃にこう言われた事がある人もいるかもしれない。『おもちゃで遊んだ後はちゃんと片付けなさいよ』と。

そうつまり今俺はその後片付けをしているわけだ。独りで、黙々と大量に仕掛けたわけだから、その片付ける数も大量である。泣きたいね。マジで。

千秋も虎杖も、鋼凧のケアに行ってしまったている。

《完全干涉》の男医師は、何か喪失感で一杯のような雰囲気のまま、いつの間にか帰ってしまっていた。

誰も手伝ってくれない。俺頑張ったのに。

しかも、この片付けはなるべく早く終わらせないと学校の七不思議の一つに認定されてしまう。

その場合は何と名付けようか。無難に、墮落場所、とかかな。

「一輝」

丁重に早急に片付けをして、もう大方終わりっていう頃。

後ろから千秋が話し掛けてきた。驚くだろ、いきなり話し掛けてきたら。

「ちよつと話があるんだけど」

「何だ？」

手を休めずに、応答する。

「何で、梓美ちゃんを助けなかったの？」

「何言つてんだ？　ちゃんと助けただろ。危険が無いように、姿を消させて」

「そう言う事じゃない」

少し強めに、まるで怒っているかのように千秋が言う。

……　やっぱり、コイツにはバレルよな。

「なんで、梓美ちゃんの大変な物が壊される時、助けに行かなかったの？　止めに行かなかったの？」

「勝つためだ。鋼凧も虎杖もいずれは敵になる。だったら早めにゲームを降りて貰うのが妥当だろ」

「なんでそこまで、このゲームに勝ちたいの？」

千秋の問いに俺が答ええないから、しばらくその場に沈黙が漂う。

「……………まさか、家族を元に戻そうと——」

「ふざけるなよ千秋。冗談にしたって笑えない」

「……………ごめんなさい」

別に謝る必要は無いのに。俺が答えなかったのが悪いんだから。だから俺は千秋の問いに答えることにする。

「見つけたんだよ」

「……………えっ？」

「コード使用者。たぶん、このゲームの勝者になれば会えるだ」

「……………確証は？」

「ほぼ無い。いつも通りの勘ってやつだ」

「勘を優先して、梓美ちゃんを見捨てたって言うの？」

「悪いかな？」

気のせいかな、場の空気が段々と冷え切っていく。

千秋がマジギレしてるのかもしれないが、俺だって揺らぐつもりはない。

「一輝、言っちゃ悪いけど……………そこまでして追う必要があるの？」

ちいは一輝について行ってるだけで、誰かを見捨てたり裏切ったりしてまで執着する気は無いんだよ」

「俺も、何で執着してるのか忘れたよ……………それでも、俺と同じ目に遭わせてやらないと死ねないんだよ」

二人目の敗北者（後書き）

うわっ、バトルをグダってしまった……。

グダってしまったよ………英語のノート整理した後だからかなあ
……？

まあ、これが俺の実力ってだけの話か。

少し昔の関係の無い話

まったくゲームにも千秋にも鋼風にも虎杖にもその他参加者にも関係の無い話をする。

それはまだ俺が養父……いや養われたような記憶がほとんど無いからやっぱ義父、濁川にじかわせむは無（仮名）に出遭っていない頃の話。

それは俺が濁川一輝ではなく、立崎一輝だった頃の話。

あまり裕福な家庭では無かったが、だからといって貧乏な家庭であつたわけじゃない。

親に厳しく躰けられた記憶はあれども、愛情が無かつたわけではない。

父や母を心の底から尊敬などしていなかったが、だからといって嫌いだつたわけじゃない。

多分、普通の……どこにでもあるかもしれないような一般的な家庭だつたと思う。

俺には姉がいた。本当に血の繋がった姉が。

姉には随分と遊んでもらつた記憶がある。家にいる時は、本当によく姉に遊んでもらっていた。

しかし姉は随分と曲者であつた。

例えば、姉がコンビニに行った時。

俺は鮭のおにぎりもついでに買ってきて、と頼んだのだが……姉が渡してきたのは昆布のおにぎりだった。

いや、それだけならまだ許せたであろう。

でもよりにもよってあのクソ姉は、俺の目の前でツナマヨと鮭とオカ力的におにぎりを合わせて数十秒で食い切りあがつたのだ。

俺が文句を言つても軽くあしらつて、最終手段の暴力に頼ろうとしても、それも軽くあしらわれた。

思い出しただけでも腹が立つ。

他にもそんな事を多々やられて、俺はいつかやり返そうと心の中で

誓ったものだ。

だからといって、姉が嫌いだったわけじゃないし、むしろ好きだったんだと思う。

俺はたぶん、家族全員、皆好きだったんだと思う。

売られる時までは。

売られると言つても、人身売買……臓器などを売られたわけじゃない。

未だに俺にもよく分からない。だけど俺はある日突然に両親から裏切られた。

仕方が無かったんだと思う。理由もお金とかそういうのじゃないんだと思う。

でもとにかく、両親が俺を売った事実は変わりやしない。例えどんな理由があろうとも。

まあそんな両親は俺が呪詛の言葉一つ唱える間もなく殺された。目の前で。

あっさりだった。全て味気なかった。空前絶後という奴だろうか？

多分少し違うんだろうけど。

簡単にまとめればこうだ。

俺の好きだった家族は、ある日、買い物に行くと息子に嘘を吐いて乗車させ、数時間車で移動したのち、よく分からない灰色の場所で、見知らぬ男共に息子を渡して、その息子の目の前で、呪詛の言葉を吐きながら両親が殺されることで、崩壊した。

今でも思う。あの汚い言葉遣いは誰に向かつてしたものだろうか？俺に視線を向けることなく、どこかに叫んでいたあの言葉は一体誰に向けられた言葉だったのだろうか？

その時、純粹過ぎる馬鹿正直な俺はそんな事を思いながら男共に目隠しをされてどこかへ連れて行かれていた。

~~~~~

「……………」

頭が痛い。若き日の自分の事など思い出したためだろうか？

……何が、何で執着してるのか忘れた、だ。

思いつきり覚えてるじゃないか。嘔吐きもここまで来れば遺伝とは思えない。

遺伝としか……………。

時計を確認する。現在時刻10:23。

……もしも今日が平日で、学校に行かなきゃいけないんだとしても

……今日はいいや。

今日だけは、いいや。

しばらく天井を眺めながら、何かを考えようとする。

だけど頭が上手く働かず、何も考える事ができない。ただ呆然に漫然に天井を眺める。

……………。

……………。

……………。

……このままだと、また眠ってしまいそうだ。

今眠ったって、良い夢なんて見れそうにない。

どうにか体を起こし、部屋を出る。

腹も若干減っている。遅めの朝食でも作るとするか。

頭を掻きながら階段を下り、キッチンへと入る。

……………異常な程、静かだ。千秋はまだ寝ているのだろうか？

いや、学校に行ってるという可能性もある。

アイツ、朝食ちゃんと食ったのかな？ 無理に起こしてくれて良かったのに。

俺の惰眠よりも朝食を食う事を優先しろよ、まったく。

冷蔵庫を漁り、適当に炒め、皿に盛り、食う。

黙って食う。だから静かだ。いつもなら千秋がギャワギャワ騒いでうるさいというのに。

ああいう夢を見た日には、千秋くらいに騒がしいバカが傍にいたほうが気が晴れるというのに。

学校に行こうか？　ここよりも静かなわけがないし、千秋や鋼凧というバカに会え……ないかもしれない。

千秋には会えるだろう。でも鋼凧は……多分まだ精神的に回復していない。脚の怪我也相当酷い様だし。

今のテンションでは虎杖にも気を遣わせてしまっただけだろう。

なら今日は、今日だけは家に居よう。

どんなに嫌でも今日だけは、家に。

流し台に食器を片付け、ソファに座る。

特に何かする事もない。暇だ。暇過ぎる。暇はあまり好きじゃない。もう少しマトモに頭が働けば適当な妄想でも想像でも戦略でも考えられるのに。

よりもよって頭が働かない。だからまた天井を見る。

ただ呆然と、ただ漫然に、天井をひたすら眺める。

今日は、あまり気分のいい日じゃない。

## 少し昔の関係の無い話（後書き）

うわっ、暗ッ！

いきなりなんで下衆主人公が鬱になってるんですか！？

あのどんな罪を犯そうとも罪悪感というものを蹴散らしそうな下衆主人公が！！

……っていう風な判断を下されてる主人公って何なのさ？

## 少し昔のどうでもいい話

俺が目隠しをされて連れられた場所は、これまたよく分からない灰色の空間だった。

いや灰色というより、確か暗かったから黒っぽいような感じだったかな？

そこで見たのは、檻の中にいる、姉。

鎖で繋がれ、身動きが取れない姉の姿を見た瞬間、俺はこう思った。ああ姉ちゃんもあの人達に売られたんだ。あの人たちの死を聞いたら喜ぶかな？ いや喜ばないだろうな。

そんな風に俺は思っていた。

物音とかで、誰かが近くにいると思って姉は顔を上げた。

そして俺がいる事に驚いて、しだいに悲しそうな顔をして謝ってきた。

何で姉が謝るのか、俺には分からなかった。分かりたくも無かったんだと思う。

悪いのは俺たちを売りとばした両親で、姉が謝る必要はどこにもない。

そう思っていた。

そしたら悪の権化……という言い方は失礼だろう。両親の死体が俺と姉の前に運ばれてきた。

多少乱雑に運ばれたのだろう。俺が見た時よりも汚れや傷が増えていた。

そしてその死体と共に、人間がやってきた。

暗くて見えなかったが、多分、男だ。女だったかもしれないが。声を覚えていないのが一番惜しい事だ。

その人間は姉に問うてきた。両親を生き返らせたいか、と。

姉はイエスと答えた。俺もその意見に賛同だった。生き返らせて、一発ぶん殴ってやりたいなど思っていたからだ。

でも幼く、純粹で、馬鹿正直だった俺にも分かっていることがあった。

死んだ人間は生き返らないということだ。

なのに人間は生き返らせたいかと聞いて来た。多分、バカにしているのだろう。そう思った。

でも違った。生き返った。俺と姉の願い通り、両親は生き返った。生きかえった両親は、俺と縛られている姉の姿を見て、謝ってきた。そして人間の姿を見て、またあの時の呪詛のように汚い言葉を吐き捨てた。

だからだろうか？

直後、両親は壊された……いや人の場合は殺されたか。

殺されて、人間が「おっと、つい誤って殺しちゃった」的な何かを言つて、また生き返った。

痛がつていた。二人とも痛い、痛いよ、と泣くように呻いていた。次第に痛みが治まったのか、さっきのように俺と姉にひたすら謝ってきた。

人間には目も向けずに、ただひたすらに俺と姉へ謝っていた。何を謝っていたのか、何を言っていたのかは覚えてない。けど二人とも謝っていた。

だからだろうか？

またすぐに壊された……殺された。

殺されて、人間が何かを言つて、また生き返った。

色々なところを掻き毟る様に呻きながら、今度は人間に呪詛の言葉を吐き続けた。

俺と姉には目も向けず、ただひたすら人間に向かって汚い言葉を吐き続けていた。

だからだろうか？

すぐさま壊された……壊し、殺された。

殺されて、人間が何かを言つて、また生き返った。

掻き毟り、掻き毟り、呻きながら、謝っていた。

人間に謝っていた。涙を流しながら謝っていた。とにかく謝っていた。許されようと必死に謝っていた。

きつと何度も殺されて心が折れたんだろう。だからさっきまで呪詛の言葉を吐き続けた相手に謝っているんだ。だからだろうか？

今度は徹底的に壊された……壊して、壊して、殺された。姉が泣き叫んでいた。もうやめて、と。

俺は姉まで殺されるんじゃないかと心配になっていた。

だけど人間はその姉の言葉を見殺しして、また生き返らせた。生き返って、悶えて、謝って、また両親は殺された。

そして生き返って、悶えて、謝り続けて、また両親は殺された。

そして生き返って、悶えて、謝り続けて、また両親は殺された。

そして生き返って、悶えて、謝り続けて、また両親は殺された。

ずっと姉は泣き叫んでいる。やめてくれ、と泣き叫んでいる。

俺はずっと見ている。何故？

状況について行けなかったから？ 違う。

恐怖に身も心も震わせていたから？ 違う。

こうなつて当然のことをしたと思つたから？ 違う。

諦めていたのだ。全部、もうこの円環から両親は逃れられないと。

生き返り、悶え、謝り、壊され、そしてまた生き返る。

このループから逃れる術を両親は持っていないし、俺もこのループを止める術を持っていない。

だから諦めた。諦めて見ることしかできなかった。

奇跡なんて待ち望めなかったし、目を逸らしたところで耳から無残な光景が想像できてしまう。

現実からは目を背けられない。妄想へ逃げることなんて不可能だ。姉は泣き叫んで、目を逸らして、諦めずに……止めて、と叫び続け

る。

多分、今だから思えることだが……ずっと姉が諦めなかったから俺は直視することが出来たんだと思う。

俺が諦めてしまったことを姉が諦めずにいたから、俺は俺でいられた。

だからだろうか？ いやそれもあるが多分、人間の器的に限度を超え過ぎてしまったんだろう。

姉が壊れた。姉の精神が壊された。壊れた。壊れ尽くした。

笑い出した。あひゃひゃうひゃひゃひゃ、と今まで聞いた事のない声で笑い出した。

何が嬉しいのか分からなかった。恐かった。壊れた姉が。

姉の全てが怖くなった。今まで両親を死を何度も見たって震えもしなかった……震える事もできなかった体が震えだした。

笑いながら、首や全身を無理矢理動かし、本気で鎖を引き千切ろうとする姉が、自分の知っている姉では無い気がした。

無理に体を動かしてるため、どこからか少しずつ出血する。それでもその自分の血を浴びながら姉は笑い続けていた。

逃げ出したかった。逃げ出せなかった。逃げ口などそう都合よくあるものじゃないんだ。

ある意味、釘付け。あの人間のことなど思考の端くれにもなかった。俺の視界には、恐怖の象徴となってしまうた姉がただいるだけだった。

少し昔のどうでもいい話（後書き）

にやはははは！

ヘッドホンして書いてるから耳が痛い……………。

## 少し昔のくだらない話

気付いたら、壁を……天井を見上げていた。

意識が途切れていた。気付いたら、レンガの壁に囲まれた場所に居た。

どこだか分からなかった。分かったところで仕方が無かった。どうせ俺以外誰もいないのだから。

……嘘を吐かれた。家族全員に。そう感じた。

両親には騙され、姉には本性を隠されていた。そう感じた  
何で騙されただろう？ 何で隠されていたんだろう？

俺が無力だったから？ 俺が非力だったから？ 俺に何かを成す力が無かったから？

そう感じて、よく分からないけど泣いていた。

泣いて、泣いて、泣いて、泣いていた。

始めは涙が出て、次に声を上げて、泣いていた。

途中から何で泣いているのかを忘れてしまったが、それでも泣きたい気持ちだったから泣いた。

泣きまくって、水分を大量に出して、声が嗄れるほど喚いて、そして。

「こんにちわ」

誰かに声を掛けられた。

最初は幻想だと思った。それを確かめるために体を上げて、誰か居るのかを確認した。

そうして、その声の主を自分の幻想だとなおさら思い込んでしまった。

壁の隙間から漏れ出す月明かりに照らされ、微かな煌めきを放つ銀色の髪。

両目の色はそれぞれ違う色で、蒼い瞳と琥珀色の瞳をそれぞれしていた。

そんな今まで見た事のない容姿をしたその頃の俺と同じ年齢くらいの少女が、居た。

声を出せず、それでも思った。天使がいる、と。

そして恨んだ。もしも俺の前に降りるのだったら、もう少し早く降りてくれればよかったのに。

神も仏も、まったくもって無情なものだ。

でも、それはただ自分の無力さから逃げ出すための言い訳にしかならず、また泣きたくなった。

そんな俺の心情を分かっているのかいないのか、よく分からないが少女は微笑みかけながら俺に問う。

「ねえ、なんで月は明るいんだと思う？」

それが、濁川千秋が俺に最初に聞いて来た質問だ。

~~~~~

「……………」

また寝ていた。よりにもよってソファで寝ていた。

首を上げて寝ていたから、肩や首筋が異常に痛い。マジ痛い。どうすんだよコレ。

ともかく、天井に橙色の光が照らされているから多分、夕方になったんだろう。

10時半から夕方までって……………5時間以上は寝てたのかよ！？

そりゃ首痛めるわ。どうすんだよ、マジで痛いぞこれ。

まあ、それは仕方が無いとして。

「…………おい、千秋。何デメエは俺の膝の上乗ってんだ？」

痛む首を下げ、真正面を見ると割と間近に千秋が居た。距離にして数十センチ。

俺の膝を跨ぐようにして座り、もう胸板に両手をついて押さえつけるように対面している。

どんだけ近いんだよ、バカ女。

「一輝、泣いてたから」

「は？」

「いや、だから一輝が泣いてたからその涙を拭いてあげようと」

「泣いてた？ 俺が？」

悪名が今にも轟きそうなの俺が？ あの夢で泣いていた？

まだ泣けた？

「……っていうか千秋。別に俺の涙拭くのに、こんなに近くなきゃいけない理由はあるのか？」

「実を言うと、バランスを崩してこんな状態になって、そしたら一輝が起き出しちゃったんです。すいません！」

「……別に、お前のせいで起こされたわけじゃねえーよ」

それもしはあるかもしれないが。別にそれで無理に起こされたんじゃない。

「おいバカ千秋」

「はい」

「取り敢えず、今すぐこの体勢を止める。お前の息が掛かってしやうがない」

「はにゅッ!？」

よく分からん声を出しながら、千秋が飛び退くようにして移動する。気のせいか夕日のせいか、千秋の頬が少ばかり紅潮しているようなしていないような。

多分、気のせいだな。こいつに恥じらいという常識が身についてるんなら、家をゴミ屋敷に変えるわけがない。

「おい千秋。お前、今日は何食べたい？」

「え、作ってくれるの!？」

「ドアホ。お前の食べたいものを今から作って、お前の目の前で美味しそうに見せびらかすようにして食うんだよ」

「じゃあ、ハンバーグ!」

輝いた千秋の顔をどん底に落としたいがために、わざわざあんな事

を言ったのに、コイツ、笑顔で答えやがって。

ああ、なんか今日はついてない日だ。自分の言葉も切れが悪いように感じる。

なんか調子悪い。っていうか首痛い。なんか千秋を騙せなかったのが悔しい。

「子供か」

千秋の言った料理名にも、悪戯が失敗して拗ねている自分にも、そんな事を思っただけで呟いてみる。

俺はキッチンではなく自分の部屋に向かい、着替えをすまして玄関に行く。

「どこ行くの？」

「冷蔵庫にひき肉なんて無いからな。わざわざ買いに行くんだよ」

「ちいも行く」

「お前は買い物カゴにお菓子とか入れそうだからダメだ」

「そんな子供っぽいことはないよ！」

「どうだか。ちいちい言ってる奴がそんなこと言っただけで説得力が無い」

そう言っただけ、俺は勝手に玄関を出ようとするが、その前に千秋に腕を掴まれる。

むくれた顔をしながら千秋は、

「ちいも行く」

再度自分の意見を主張してきた。面倒な奴だ、まったく。

「腕を掴むな。虎杖とか学校の奴に見られたら恥ずかしいだろ？」

「うん」

パツと俺の腕を離して、すぐさま千秋は靴を履く。

もう今日はダメだ。何か舌が上手くいつもみたいに回らない。

「鍵閉めてから来い」

「分かった」

無邪気に笑う千秋を連れて、俺は近くのスーパーに行った。

何か今日はホント、良くない日だ。

少し昔のくだらない話（後書き）

意味不明な文章はここで終わって、次からはバトル無し、騙し合い無しのお遊び回ですよ多分。

っていうか結局、一輝の勝ち残りたい理由って何なんでしょうね？

お見舞い

「そろそろ動き出す」

「えっ？」

スーパーで色々と買って、家帰って、食材洗ったりして、みじん切りして、こねて、空気を抜いて、型作って、焼いて、蒸して、さらに盛り付けて、食ってる最中。

見せびらかすように俺がハンバーグを食い、釣られて千秋もハンバーグを口にいしている時。

俺はそう言った。

「それってどういう事？」

頬にケチャップを付けた千秋が俺に問うてくる。

「打って出る、ってことだな。ケチャップ拭け」

「ありがと」

俺が差し出したティッシュで頬を拭き、続きを訊きたそうな顔をしてきた千秋。

「今までは参加者の誰かが動き出すのを待ってたが……まあ《完全干渉》がよりにもよって俺たちを標的にしてきたからな。こっちが手を組んでは他の参加者にもバレただろ」

「だから、隠れることから潰し合うことに変えるの？」

「現参加者は7名。こっちには3名。残りは4名。でも、鋼皿の協力が得られればこっちも4名。人数的には対等に立てる」

「……でも、敗者はゲームに介入できないんじゃないの？」

「ゲームじゃない。敗者が禁止されることは、物の破壊と参加者の殺害だ。協力してもらう分には問題無い」

「じゃあ、他の4名だって《完全干渉》に話を持ちかけるかも……」

「《完全干渉》はその話を棒に振る。アイツは元々……学校に来る前から俺たちの事を調べてた。多分、アイツには4人が手を組んだこともバレてただろう。それでも奴は独りでやって来た」

「……他の参加者と協力する気なんて更々無かったから？」

「その通り。だから奴は、協力しない…………… つつても俺から話を持ちかけるつもりでいるんだが」

「……………一輝って、昔より外道になったよね」

「勝つためだ。その為だったら外道だろうが下衆だろうが鬼畜だろうが悪魔だろうが何だってなってる」

「そう……………。でも誰とも協力する気が無い《完全干渉》が手を貸してくれるとは思わないんだけど」

「そういう時は《非観理論》の使い時だ。情報を集めれば自然と見えてくる、アイツのゲーム参加理由」

まあ、ロクでもない事だとは思っけどな。

利点があれば《完全干渉》は俺に協力するはずだ。

「ともかく……………まず次に誰を敗退させるかだ」

「それより前にやる事があるよ」

「……………えっ？」

千秋の言葉に俺は耳を疑った。

俺が何かを見逃していた？ そんなバカな。まだ悪夢心地ってことか？

「梓美ちゃんのお見舞い。一輝はまだ行ってないよね」

「面倒臭い。パス」

「《非観理論》を使うんでしょ？ 《否定定義》が無ければ聞き出せないんじゃない？」

「くっ……………」

千秋に極めて正論を言われてしまうなんて……………ホント今日は調子悪い。

「……………分かった。いつ行けばいいんだ？」

「明日」

「ああーと、その……………」

「行くよね？」

「……………はい」

バカな千秋に言い包められてしまうなんて……もう今日はダメだ。
ダメの日だ。

ああ、もう、調子が狂う。いつものペースじゃない。

「御馳走様」

「ごちそうさま」

翌日の放課後。

学校を無断欠席したんだとずっと思っていたんだが、どうやら昨日は勤労感謝の日だったらしい。

っていうことは、もうすぐ11月も終わるんだなー。

つか、昨日、千秋はどこに出掛けてたんだ………って、鋼風の
お見舞いに行ってたのか。

普通に考えればそうだろうな。多分。

「おい、鋼風、元氣かー」

病院の個室のドアを開け、適当に間延びした適当な言葉を投げかけてみる。

「……………」

返事が無い。ただの屍のようだ。

……じゃなくて、ただ普通に寝ているだけである。

「……タイミング悪いね」

「だな」

一緒に来た千秋の言葉に激しく同感しながら、室内に入る。

病院の個室……人生初の侵入である。

あんま怪我しても病院なんて行かなかったからなあ。

「ちい、お花の水、変えてくるね」

「分かった」

適当にあった椅子に座って茫然としてみると、千秋がそんな事をいって花瓶を持って出て行った。

……………する事が無い。ある意味、気まずい。

いつその事、本人を起こしてしまおうか。ぐっすり寝ているのがムカつくし。

いやしかし、これでも俺は人の子。それはやってはいけない気がする。

まあ、でも鋼風だしイイかな？

「……イイわけないでしょ、変態覗き魔」

「あれ？ 起きてたか？」

俺が行動に移ろうとする前に、鋼風がうつすらと瞼を開けて、体を起こす。

「何しに来たの、カス？」

「何って、千秋の付き添い」

「………濁川先輩は？」

「花の水変えるとか言っただけで出て行った」

「そう……」

「………お前、大丈夫か？」

「何が？」

会話が途切れそうだったから、適当な言葉を投げかけただけなんて言えない。

「脚とか……精神的な面とか」

「脚の方は治ってきてる。精神的な面ってのは意味が分からない」

「ならそれでいい」

うん、やっぱり気まずいから一旦退室！

しおり

「なあなあ、千秋さんや」

「どうしたの一輝？」

適当に千秋を探しに行ったのは良いのだが、数十秒で見つかるから嫌なんだよな。

もうちょつと手間を掛けさせろ。あの空間に俺を戻させるな。

つていうかいつその事、相談してみるか千秋に。

「俺、なんかあの空間、気まずいんですけど」

「それは一輝の心に罪悪感というものが生きてる証拠だね。良かった、良かった」

「良くは無い。何が良いんだよ」

「直したげて。ヘヤピン」

「……………それが目的かよ」

俺はようやく千秋が見舞いに行かせた理由が分かった。

ようは壊れてしまったヘヤピンを即刻直せとのご依頼だったわけだ。

しかも依頼料は俺の罪悪感。最悪だね。

「無理だ」

まあでも、それが出来たら俺だってすぐにやってるわけだよ。

気持ち落ち着かせるために、即刻に。

「嘔吐き。一輝なら出来るでしょ？」

「お気に入りを変えたくはない。それに色々と下準備が必要だ。今すぐ直すのは無理」

「ちいが居れば、下準備なんて必要ないでしょ？」

「まあ、そうでもないわけだ」

ともかく今すぐは出来ない。それが結論。

「じゃあ、一輝が何か作っただげて」

「……………は？」

「梓美ちゃんに、一輝が、何かプレゼントしてあげて」

「俺のプレゼントなんてすぐに捨てるぞ、鋼凧は」

「じゃあ、すぐに捨てそうもないプレゼントをあげて」

わお！ この銀髪、なんていう無茶振りしてきやがるんだ。

「時間稼ぎはしてあげるから、あと1時間以内に作って」

「姫様？ それは私には無理な所業でございます」

「作れ」

「無理だっつってんだろが、人の話を聞け」

「作れ」

こつちの話は聞かないってか？ 上等じゃねえーか。

多少プランに変更はできるが、バカ千秋に売られた喧嘩を買わないわけにはいかないだろ。

「1分。病室へと戻るこの間に創ってやるよ」

「凄いね、一輝はもしかしたら作家とかになれるかもよ？」

「なりたくないし、あの程度のでっち上げなら幾らでも誰でも作れる」

「……………？ 濁川先輩、何の話をしてるんですか？」

病室へ戻ってくるなり鋼凧が質問をかましてきた。

まあ俺じゃないから良いんだけど。

「一輝の発想の凄さについて話してたの」

「俺は自分の発想よりも、お前のバカさ加減に驚くがな」

「だって優しい幻想と厳しい現実だったら、優しい幻想を信じたくなるもん」

「……………だから何の話をしてるんですか？」

主語が抜けたような会話をしてたからか、鋼凧が不貞腐れ始めた。会話の輪に入れないからって不貞腐れるなよ。子供かよ。

「ほら」

仕方なく、俺はポケットから鋼凧にある物を渡す。

「……………しおり？」

「ああー、でもお前じゃ読める本も無いし返せよやっぱ」

「ヤダ。これ一生物のネタにできるから！」

「ネタとか言うな！ やっぱり返せ！」

「ほらほら一輝、そろそろ帰るよ」

「千秋、テメエ……本当に覚えとけよ！ 十倍で返してやる」

「うん、そうだね。だから帰ろう、もう」

「ぎゃああああ！ 千秋ごときに軽くあしらわれたあー！！」

もうダメだ、俺のパーソナリティがズタズタだ！

ボロボロを通り越して、ズタズタだ！

「あ、そうだカス」

病室を出て行く前、鋼凧が声を掛けてきた。

「何だ？ 文学少女になる宣言でもするのか？」

「違うわ。これはちゃんと大事にする。それと――」

言葉を一旦区切り、鋼凧は笑顔でこう言った。

「もう、わたしは大丈夫。お蔭様で立ち直ったよ」

「……そりゃ良かったな」

まさか、鋼凧から礼を言われる日にくるとは。

なんか調子狂うんだよな、最近。

ホント、なんとなく調子を狂わされてばかりな気がする。

交錯

「貴女が《干渉不可》ね？」

「……………誰？」

夕方の電車内にて、とある少女が誰からか呼びかけられた。

席に座る事なく、外を向いて乗車している少女の視界には絶対に声の主が映るはずもない。

だから問いかけた。

「《禁思用語》って言葉だけで分かってもらえると嬉しいんだけど」

「…………ゲーム参加者、ってわけね」

声の主…………《禁思用語》の姿も見ずに少女は会話を進めてしまう。

その少女の態度に少し苛立ちながらも、《禁思用語》は少女にある話を持ち掛け始める。

「ねえ、ちよつと協力しない？」

「協力？」

「そう協力。今ちよつと勢力を集めているの」

「……………何で？」

「先日、《否定定義》が《完全干渉》に、《完全干渉》が《非観理論》に負けたの。知ってる？」

「初耳ね」

少女が集めている情報は、ゲームの進行状況ではない。

だからその情報は本当に初耳だったし、別にどうでもいい情報でもあった。

「それで分かったんだけど《非観理論》《否定定義》《異見互換》

《無影無綜》の四人が手を組んでるの」

「……………」

「こつちも《結論反転》とは手を組んでるんだけど、それでも二人

《否定定義》が抜けたからといって、三人には勝てそうもないわ」

「…………あたしに頼るより《完全干渉》に頼った方が可能性があるか

もよ？」

そう提案する少女に対し、『禁思用語』は少し溜息を吐きながらこう答える。

「アイツはダメ。完全に一匹狼っていう性格してるし、誰かと協力なんて考える性質じゃない」

「へえ……」

「で、貴女はどう？ こっちに協力しない？ できれば強制的に協力してもらいたいんだけど」

「するわけないでしょ、バーカ」

少女がそう言うと共に、停車し、車両のドアが開く。

「あ、ちよつと」

そのまま自然と電車を降りようとする少女の肩を掴み止めようとするが『禁思用語』が伸ばした手は、少女に触れる事無く、空を切る。

「じゃあね『禁思用語』。次遭う時がないことを祈るわ」

ドアが閉まり、そのまましばらく少女は行ってしまった電車の方向を見る。

(……どんな形であれ、これでやっと『無影無綜』に辿り着けるか……)

そう思いながら、少女はホームを降りたって行った。

■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■

「べえくしょんっ!!」

うう……なんか寒気がする……。

鋼皿か？ 鋼皿あたりが俺の悪口を言ってるのか？

まあ、それでもいいから鋼皿にはさつさと怪我を直してもらいたい。でなければ『非観理論』が使えないからだ。

別に鋼皿に無理をさせれば使えない事も無いんだろうけど、千秋が『梓美ちゃんはまだ怪我人なんだよ!』とかうるさく文句を言うてくる。

ああ本当、さつさと鋼風怪我のおんねかなあー。

溜息を吐きながら天井を見上げる。

現在は家の中に独り。千秋はどっかに買い物に行った。ついでに頼んだ食材をすっかり買ってきてくれるだろうか？

色んな事が詰みに詰んで、家の中でただ静かに待つだけでも気が詰まる。

《無影無綜》は窃盗にも奇襲にも隠蔽にもスパイにも向いてるが、なんせ、相手が何処の誰だか分からない状況だとコソコソと動くことも出来ない。

だから今は《異見互換》の視界を共有できるルールを使って、映像のみの情報を千秋に集めてもらっている。

《非観理論》が居るのに、こんな効率の悪い方法でしか情報を集められないなんて……………。

状況的には最悪。こちらから仕掛ける事が困難過ぎる。

まあ、こんな状況を作り出したのは他でもない《完全干渉》と俺である。

自業自得とはこの事か。まったくもって笑えない。

「遅いなあ……………」

千秋は一体どこで何を買っているのだろうか？ 帰ってくるのが遅く感じる。

まあ俺の体内時計が焦りと共に異常な早さで進んでいるだけかもしれないが。

やりたい事があっても、やれる状況ではない。

この前のように呆然と漫然と天井を眺めていたら寝ていたというオチも嫌だ。

さて、どうするか……………。

一人才セロでもするか？ いや、俺がしたくない。

そんな風に、適当に思考を回していたら千秋からのメールがあった。もしかして………… 買い物途中で何かあったのか！？

『ちい、くじ引きで3等当たった！！』

おめでとさん、と短く返信をし、俺は携帯を放置する。

そもそも何かあった後にメールなんてしてこれるのか？　そういう冷静な考えが足りなかった。

本当、この前から思考が絶不調だ。別に平和ボケをしたわけでもないのに。

悪夢ボケという新種のボケ型だろうか？

まあ、そんなのどうでもいい。まったくクダナイ事を考えることだけはいつも通りだ。

いつの間にか放置していた携帯電話がまた振動している。また千秋からのメールだろう。

『梓美ちゃん、明日退院だって！』

「…………ハア」

思わず安堵の溜息を吐いてしまう。これで明日から動き出せる、色々々。

詰んでいた状況が一気に切り開けてきた。

返信はせずに、そのまま携帯の電源を切る。

この勢いだと多分、千秋がくだらないメールをいくつもしてくるんだろうなと思ったからだ。

交錯（後書き）

またgdgdだよ……………ほんと、まったく。

提供者

「3100円、か……………」

とある雑居ビルの2階にある診療所の診察室にて、春永氷雨は椅子に座りながらそんな事を呟いた。

彼の視線の先にあるのは、医師免許証。

先日、虎杖によって切断されたため、再交付をもらったのだ。

（……………命と同等に大切にしていた物の価値は、3100円か……………）

医師免許証の再交付には手数料として3100円が掛かる。

その値段がどうも、自分が大切にしていた物の価値に思えてしまう。ゲームの敗退条件である、物の破壊によって氷雨はプライドに少しばかりの傷を負っていた。

（……………安い紙切れだとしても、一応は俺の誇りだったんだけどなあ……………）

そんな事をぼんやりとっていると、どこからか鈴の音が鳴った。診療所のドアに付けてあるものだ。誰か来た時に分かり易いように付けておいた。

「ちゃんと見ておけよ……………今日は休診日だろおが……………」

そんな事をぼやきながら、それでも自分がドアの鍵を開けていた事にも少しばかり呵責があると思ひ、仕方なく診察室から出て行く。

「あのおー、すいませんが今日は休診日なんで——」

面倒臭そうに頭を掻いていた氷雨は、途中で言葉を切る。

理由は簡単。

相手が面倒な屁理屈を立て並べる前に、脳に干渉して追い返そうと思っていたからである。

その干渉が、出来なかった。

氷雨は来訪者の姿を確認する。少女だ。

赤みを帯びた瞳に、髪型はポニーテール。まだ少しばかり幼い顔付

きに、身長などの見た目からして中学生だろうか。

そんな少女に自分のコード《完全干渉》が通用しなかった。
となるとこの少女も、コード使用者か。

「——何の用だ？ 新聞の勧誘も、ゲーム関連の勧誘もお断りなんだが」

「勧誘じゃなくて提供してもらいたいんだけど」

「何をだ？ 何にしる断るが」

少女が自分を訪ねてきた理由は、おおむね察しがついていた。
わざわざ敗者である、もうゲームに参加していない自分に求めるものなど二つなどしかない。

一つは、先日来た《禁思用語》と同じ、ゲームを有利に進める為の協力。

もう一つは、とある四人のコード使用者についての情報提供。
そのどちらかだ。

「《無影無綜》についての情報提供をもらいたいんだけど」

「ム力つく野郎だった。俺から言えるのはそれだけだ」

そう言っつて、氷雨は指を弾く。

途端に無数の氷の針が出来上がり、少女へ向かって一直線上に突撃する。

しかし氷の針は、少女の身に触れる前に蒸発したように溶けて無くなる。

「やっぱりお前のコードは《干渉不可》か」

「そう。貴方とのコード相性は最高よ」

《干渉不可》のルールなど楽に検討がつく。

あらゆるものからの干渉を拒絶する。

大方、そう言っつたものだろう。故に氷雨のコードによる干渉の類は一切効かない。

氷雨からしたら、天敵のようなコードだ。

「はあ……ゲームに負けたのを教訓に、隠居生活でもしようかと思っただのに」

《禁思用語》も《干渉不可》も何故、負けた自分などを構う暇があるのだろうか？

まだ参加者は7人もいるのだ。そちらに構えばいいのに。

溜息を吐く氷雨の姿を見て、勝利を確信したのか、少女は歩いて近付いて来る。

「さあ《無影無綜》の情報を――」

「嬢ちゃん、生意気に俺に命令しようとしてんじゃねえーよ」

そう言うとき氷雨はもう一度、指を弾く。

そんな言葉も行動も気にせず、近付いて来ていた少女は、急に膝をつくことになる。

いきなり立ち眩みのようなものがしたのだ。

「あらゆるものを拒絶する、あらゆる者から観測されない。そんなルールがチートだと思えるのは高校生までだぜ。大人の世界はもっとシビアだ」

胸に苦しさを覚えながら少女は動揺する。

自分には、あらゆるものも干渉できないはずなのだ。コードであれば物理法則であれ、少女が拒絶してしまえば干渉できなくなる。

なのに、どういうわけか氷雨のコードによって今自分は干渉されている？ そんなわけがない。

自分のルールは絶対だ。

その通り。少女の思考は一部分を除いて何も間違っていない。

「別にお前に干渉できなくても、他のものには干渉できるんだよ。バーカ」

ようは氷雨はこう言っている。

直接干渉が不可能な相手には間接的に干渉すればいい話だ、と。

《非観理論》の時は、どこに居るかが分からなかった為、いつきに全域攻撃をし油断を誘う事しか出来なかった。

しかし今回は違う。

コードを無効化する《否定定義》も居なければ、相手の姿だってしっかりと見える。

ならば相手の周りの環境に干渉し、相手に間接的にダメージを与えればいい。

例えば、少女の周りの酸素濃度をゼロにするように干渉する、とか。そうすれば少女は息を吸う事はできず、息を吐けば、そこに含まれる幾分の酸素も除去できる。

「がはっ……………けほっ……………ッ!？」

少女は首辺りを耑るように手を動かしながら、空気を求めるように悶える。

このまま行けば、窒息死……………いや、それよりさきに脳死をしてしまっただろうか？

ともかくこのままでは少女は死んでしまう。

悶える少女の姿を見ながら、氷雨は干渉を解いた。

「かはっ……………けほ、けほ、けほッ!」

咽るように咳をする少女。いきなり新鮮な空気を吸ったためかだろうか？

元から氷雨に少女を殺す気などなかった。そもそも殺す事すら許されない。

ゲームのルール上、敗者である氷雨が、参加者である少女を殺す事は適わないのだ。

「これに懲りたら、今すぐ帰りな」

そう言つて、氷雨は診察室へ戻ろうとする。だが。

「ッ!」

数秒で呼吸を整えた少女は、飛びかかる様にして氷雨の首を掴み、そのまま全体重を掛けて氷雨を押し倒す。

「拒絶!」

いきなりの事で流されるまま床にうつ伏せ倒れてしまった氷雨の首に、少女の手から押し潰すように圧力が掛かる。

それは人の体重を掛けて潰すものとは違う。

少女の手に触れられている部分が、無理矢理内側に押し込められる

ような感覚。

無理に少女の手から離れようと皮膚や筋肉が内側へ、内側へと逃げ
いるような感覚。

このままでは氷雨の首の中が変形してしまうだろう。

(……………このガキ……………ッ！)

少女を退けようにも、直接干渉が出来ない上、この至近距離では間
接的に干渉した場合、自分自身にも影響が及ぶ可能性がある。

そしてこのまま首に手を当てられていれば、愉快的首の形をした死
体になってしまう。

氷雨は、少女に降るしかなかった。

提供者（後書き）

《完全干渉》 あっさり敗北。

まあ、ゲームのルールと、相性の問題が重なったからなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2876y/>

クローバー：コード

2011年11月23日13時50分発行